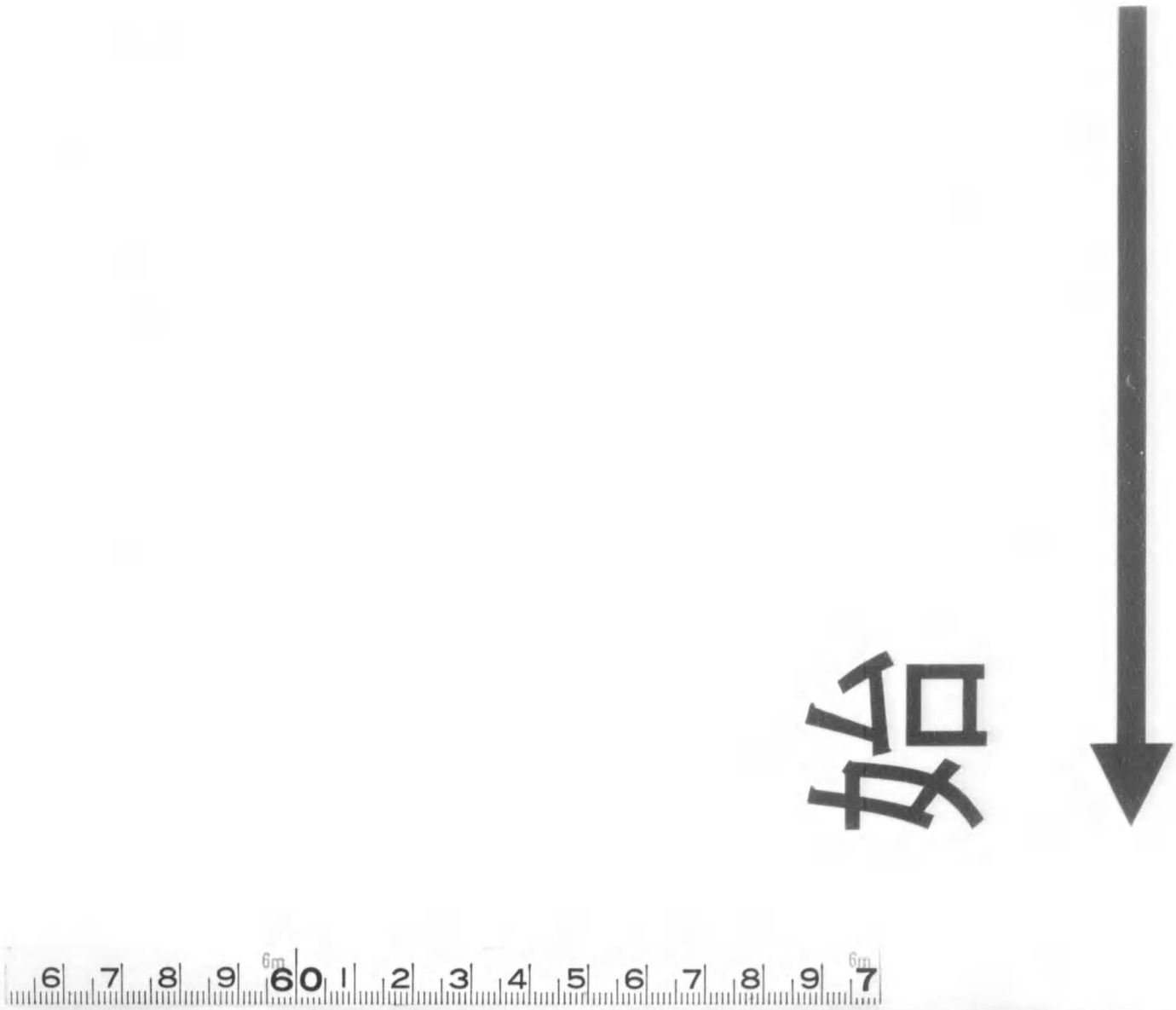

324
557

註評永祖釋尊觀

324
557

324-567

高田道見評註

評註 永祖釋尊觀

東京 佛教館發行

大正
7. 2. 27
内交

序言

我宗ニハ從來嗣法傳法ト稱シテ專ラ歸依法ノ一寶ノミヲ尊重シ、未タ曾テ其ノ根本タル歸依佛ヲ尊重セサルカ如クナリキ、而シテ此法寶ヲ傳持スル僧寶ヲ尊重スルコトハ却テ其ノ歸依佛ニ勝レタルモノアルカ如シ、故ニ護法利人ヲ念願スト雖モ信佛稱名等ヲ尊重セサルノ感アリ、故ニ大恩教主ノ本師如來ノ佛寶ニ對シテハ久シク之ヲ敬遠シテ恰モ赤子ノ父母ニ於ケルカ如ク戀慕渴仰ノ信念深カラス、然ルカ故ニ稱名禮拜等ノ行持純一無雜ナラサル所以ナリ、而シテ又歸依僧寶

ノ功德モ尊重セサルニアラサレト法寶ノ如クナラス、往昔正像二時ノ如キハ幾多ノ賢聖僧番々ニ輩出シテ法藏ヲ護持シ群生ヲ利濟シタリト雖モ、末法五濁ノ惡世タル今日ニ至リテハ凡庸僧ノミ稻麻竹葦ノ如クニシテ賢聖僧ハ之ヲ求ムレトモ遇フコト能ハス、古人云ク僧重キトキハ法重ク、僧輕キトキハ法輕シト、法ノ本體ハ不增不減ニシテ古今ノ差異無シト雖モ人ニ依テ弘マル法ナルカ故ニ之ヲ弘ムル僧寶タル人ニシテ已ニ是ノ如クナルニ於テハ法寶ノ衰微ヤ如何トモスルコト能ハス、之ニ依テ上古ハ其ノ法器ヲ見テ正法ヲ嗣續シ其器ヲ得サルニ於テハ漫リニ信衣佛鉢ヲ傳ヘサリキ、例ヘハ黃梅ノ五祖弘滿禪師カ、其盧行者タリシ大鑑慧能ニ傳法傳衣スル時特ニ其ノ夜半ヲ選ミタルカ如シ、开ハ其器ニアラサル傍人ノ盜法ヲ廻避シタルニ在リ、而シテ五祖以前ニハ未タ嘗テ夜半傳法ノ事有リシヲ聞カス、今ノ世ニ至リテ尙三更入室ノ古式ヲ取ルモノハ且ク其ノ古風ヲ學フニ過キス、今何爲レゾ盜法爭衣ノ者アラン、然リ而シテ其形式ノミヲ存スルモノハ漸ク法僧二寶ノ落地ヲ證スルニ足レリ、此時ニ方リ法僧ノ二寶ヲ以テ大法ヲ弘通シ群品ヲ利濟セントス

ルハ難中ノ難タリ、然ラハ如何ニシテ則チ可ナラン乎、謂ク唯是レ歸依佛寶ヲ尊重スルニ在リ、所謂我宗ノ歸依佛ハ面授正傳ノ釋迦牟尼佛アルノミ、此外ニ佛如來ノ尊名ヲ聞クコト有リト雖モ其ハ正傳ニ非ス、正傳ノ歸依佛ハ伽耶降誕ノ本師釋迦牟尼佛アルノミナリ、更ニ法報應ノ三身ヲ區別セス、只印度實現ノ釋迦牟尼佛ヲ仰キ奉ルノミナリ、之ヲ我宗正傳ノ信佛ト名ク、信佛ハ法僧ノ源ニシテ功德ノ母タリ、信佛現成ノトコロ法僧オノツカラ其分アリ、信佛ハ本ナリ法僧ハ末ナリ、其本亂レテ其末安ンゾ治マラン。

然ルニ本宗ハ由來歸依信佛ノ本亂レタルカ故ニ法僧ノ二寶隨ツテ衰ヘタルコト已ニ尙シ矣、然ラハ此三歸依ヲシテ再興セシムルニハ、其本ニ溯リテ歸依信佛ヲ專一ニ宣揚セサルヘカラス、其ノ之ヲ宣揚スルニハ其ノ本據ヲ佛經ニ求ムルハ論ヲ俟タスト雖モ且ク之ヲ祖典ニ求ムルヲ最モ宗門ニ親シキ捷徑ナリトス、又之ヲ祖典ニ求メサレハ永平門下ニ於ケル歸依信佛ノ徒ト稱スヘカラサル也、是レ余カ茲ニ永平祖師ノ著書中ヨリ、密ニ親シク信佛釋尊ノ祖語ヲ拔萃シ來リテ此一篇ヲ成ス、余初心晩學ノ爲ニ婆心ヲ垂レテ之レニ評註

ヲ加ヘタリ、此レハ是レ永平祖師ノ皮肉骨髓頂顙眼睛ナリ、永祖ノ流レヲ汲ム者ハ一人トシテ祖意ニ違スルコトヲ得サルナリ、之ニ違スル者ハ永祖ノ兒孫ニ非ス永祖ノ門流ニ非サルナリ、嗚呼是ノ如キ熱烈ナル信仰、片々タル赤心ノ餘瀝豐富ナルニモ拘ハラス、祖師滅後七百年間、其ノ正法眼藏、廣錄等ノ如キ浩瀚ナル翰墨裡ニ埋沒セラレ、其法孫及ヒ檀信ト雖モ親シク之レヲ拜覽シ之レヲ參究スルコト能ハサリシハ惜ミテモ尙餘リ有リ、是レ所謂法寶尊重ノ禪風當時其ノ周圍ニ吹キ荒ミ、傍ラニ淨土門流ノ念佛天下ヲ風靡スルノ勢猛烈

ナルモノアリシニ由リ、之レト優劣ヲ爭ハンカ爲メ、彌陀念佛ノ殊勝ナルニ反シ坐禪三昧ノ活潑ナル宗乘ヲ擧揚シ、高ク向上ノ機ヲ接シテ西來直指ノ祖道ナリトシ、人ヲシテ正傳ノ王三昧ニ住セシメンコトニ力メ、信佛ノ方面ハ且ク他ノ淨土門流ニ讓リ、信僧ノ方面ハ彼ノ密門ニ委シ、禪門ハ唯タ信法ノ一門ヲ分擔シタルノ頑アリ、是レ禪門カ法寶尊重ノ一方ニ偏シタル所以ナリ、此ノ影響ヲ受ケタル我祖ノ書中ニ歷代祖師中ニモ稀ナル信佛ノ尊語豐富ナルモノアルヲ閑却シタルハ時代思想ノ然ラシメタル者ナラスンハアラス、故ニ滅

後ノ法孫中、英邁卓越ノ宗師尠ナカラスト雖モ、時風ニハ敵スル能ハス、只管打坐ノ隨法行ノミヲ宣揚シテ念佛稱名ノ隨信行ヲ拋擲シタルノ趣キアルハ爭フベカラサルノ事情ナリトス、然レハ則チ縱令念佛修懺禮拜看經等ノ隨信行アルモ且ク之ヲ第二義門頭ノ施設トシテ、宗門ノ第一義門ハ隨法行ニ在リトス、然レドモ今後ノ宗門ハ入理ノ深談ヨリモ門庭ノ施設ヲ以テ第一義トセサルヘカラサルニ由リ、久シク開鑰セサリシ寶藏ヲ打開シテ嫡嫡相承面授密傳ノ第一義タル眞佛釋尊ノ赫赫タル靈光ヲ海ノ内外ニ發揮シ、方便化佛ノ正

傳ナキ薄弱ナル信仰ヲ壓倒シテ、茲ニ完全無欠ナル大本尊ヲ開立シ、眞實他力ノ信仰ヲ皷吹スルハ吾等法孫ノ大任務タリ、余ハ其ノ材料トシテ此ノ一篇ヲ永平門下ノ道俗ニ提供ス、冀クハ是ニ由テ信佛本位ノ宗風一ヲ擧揚センコトヲ

維時大正七年一月二日

永祖正傳第三十葉豫州佛國山瑞應二十六世

墻外道見敬識

洞宗は佛本位か法本位か

余を以て之を見れば正しく佛本位の宗旨であると斷言する、而も开は化佛本位に非ずして眞佛本位である、その眞佛は釋迦牟尼佛である、而して洞宗には從來一定せる所依經がない、その所依經のないのは以心傳心として佛語を傳へるのではなく佛心を傳ふるのであるからのこと、彼の彌陀大日藥師觀音地藏等の佛菩薩は佛語を文字に寫した經典の法佛なるがゆゑ嫡々相承し來れる人佛と同等に論ずることは出來ぬのである、人佛は事佛にして法佛は理佛である、理佛には形もなく影もなく將た音聲もない、音聲あり形影あるは事佛である、事を離れて理なく理を離れて事なきが故に、事佛たる釋尊の佛語に現はれたる諸佛が釋尊の反影たることは論ずるまでもなき事である、而もその反影たる佛名を捕へ來りて事佛たる釋尊に髣髴たる佛畫佛像を彫刻するによりて偶像教なりとの譏りを受くるのである此れは其の無きものを云何にも有るが如くに畫き出すによりて聽とその譏りを招くものと云はねばならぬ、然れども釋迦牟尼佛の如き已に人間の歷史に遺りたる佛陀の像を造るは、基督教徒が基督の像を造ると同一般にて、その御面相は寫眞術の開けざる當時のことなるゆゑ其の眞相を寫し傳へることは不可能なれど、其の大人格を想像して之を畫き之を造ることは之を戀慕し之を渴仰する佛弟子佛教徒の信仰にして而も其の記念物である、故に洞宗の本尊佛は佛語の佛經に依りて假設したる經宗の理佛法佛とは全く其の選を異にしてゐるのである、而も彼の法佛は形像として見るべきものなきが故に傳ふべき衣鉢もないが尼師壇もない、また有らう筈がない、然るに洞宗は人佛の釋尊直傳の宗旨なるが故に佛衣佛鉢(縱ひ模擬したるものにもせよ、否模擬せざる眞物は達磨尊者より六代の慧能まで傳はりて之を廢止し其の代りとして衣鉢を模造せしものである)並に尼師壇を傳へ得て今日に至りたる、而して經典の代りには嗣書大事血脈の三物を傳ふるのである、その嗣書の中にも血脈の中にも禮拜し恭敬し信仰すべき佛陀は釋迦牟尼佛のみにて虛舍那佛もないが彌陀大日地藏觀音藥師乃至三世十方の諸佛もない、僧として摩訶迦葉以下永平高祖乃至太祖歷代の祖師人師の名義があるのみ、其の外には無形の正法眼藏涅槃妙心がある、此の中に一切經卽ち三乘十二分教を含むといへば云はるゝのである、けれども正傳とは云はれない、而して其の坐禪の本體は正法眼藏涅槃妙心である、其の妙心は卽ち佛心である、其の佛心を修證せしむる方法を說き教へたるものを法寶といふのである、其の法寶に隨順して佛身の幾分を修證したのが卽ち歷代の祖師である、而も其の祖師の流れを汲む者が發心修證するのは祖師に憑ひて佛身の幾分を修證せむとするのである故に永祖は今身より佛身に至るまで歸依佛歸依法歸依僧と開示せられた、仍て洞宗究竟の目的は信佛本位にして信法僧は其の手段に過ぎぬ。

凡例

○余が本篇を謹選する所以のものは永平初祖承陽大師の本旨に基きて自未得度先度他の根本義を顯示せむとするに外ならず。

○倩々三國傳燈の來由を回想するに歷代列祖の正傳し唱道し來りたまひし第一義は、專ら法本位の施設のみにして佛本位の唱道にあらざりしが如し、其法體たるや釋迦牟尼佛所證の妙法なるが故に尊貴最勝なりと雖も、展轉して祖々の身に在りては其の功用佛陀の如くに顯はれず、永祖示して云く、此法は人人分上豐に具はれりと雖も修せざるには顯はれず證せざるには得ること無しと、歷代祖師は其分に應じて修證現成せりと雖も、末世の凡夫に至りては僧俗倶に修證現前せざるが故に口に其の妙法を談ずれども實際に之を身修心證すること能はず、已に身修心證することを得ざれば之を學び之を說くとも何の所益か之れあらむ、然れば則ち法本位の宗乘は今の人世に適應せざるなり、而も此の法本位の宗乘は衆生の主觀法に屬するが故縱ひ其の歸依佛を談ずるも自己天眞の本覺佛に歸結して他の客觀境に求佛することを許さず、法も亦自己の心法にして佛

陀所證の妙法に非ず、然れども衆生本具の主觀的佛法は自から之を開顯すること能はず、必ず他の客觀境に在します佛陀世尊の他力を借らざれば開顯することを得ず、然るに祖師滅後の雲孫は自力主觀の佛法のみを談じて他力客觀の佛法に歸依すること薄きが故に法力未だ顯はれず信仰未だ具せざるを見る、若し此儘にして信界の革命を爲さざるに於いては人法倶に衰へ遂に無佛無信の宗門となりて自滅を免かれざるに至らむ、是れ祖訓に基きて他力信佛の宗要を發揮せむが爲に此編を謹輯せざるを得ざるに至れるなり。

○苟も道俗の信仰を增進せむとするには出纏無垢なる佛陀本位の法門を開闡せざるべからず、而も其の佛陀は他の客觀境に在します釋迦牟尼佛なり、此外人格として歸依したてまつる佛陀は在しまさざるなり、或は大乘佛敎中に三世十方の諸佛諸菩薩及び恒河沙數の如き無量不可思議の佛如來在しますが如くに說示しあるものは皆悉く釋尊一佛の轉法輪中に顯はれたる口輪轉の說佛なるが故に其實は法佛なり、法を以て身とするが故に之を法身佛といふ、法身佛は釋尊の如く其の靈體あるにあらざるが故に之を方便佛といふ、方便佛は衆生化變の儀式によりて假に其名を安立せしものなるが故其の人格的靈體あるにはあらざるなり、譬へば月を標する指の如く指は是れ月に非ず月は是れ指に非ず、然れども愚人は其の指を見て月なりと思ふ、彼の愚人は經文の中に散在せる佛名を見て眞に其の佛陀在しますかと誤まる、故に修多羅の敎は月を標する指の如しと說きたまへり、然るに佛說なるが故に虛妄あること無しと執するが如きは愚人の株を守つて兎を待つに同じ、其愚や及ぶべからず、其癡や語るに足らず、然るに眞佛釋尊は大悲の願力に乘じ、衆生の疑惑を破らむが爲め、自から挺身して說法度生したまへり、見よ他の方便佛は元來實在にあらざるが故、一佛として此の實社會に應現したまはざるにあらずや、應現したまはずと雖も佛說不、虛妄なりと信じて安身立命するものは其機根に任すと雖も、吾等が機根には合はざるなり、我が承陽高祖は此等の化佛を念じましまさず、眞佛釋尊を娑婆界の救世主として篤く信仰したまへり、然るに雲孫中高祖に此の篤き信佛の念ましますことを知らずして只管に無佛無信の祖訓のみを固執するものあるが故特に此篇を纂輯せざるを得ざるに至れるなり。

○我が承陽高祖が釋尊一佛を慈父世尊とし法界中尊として歸依渴仰し、恭敬禮拜したまひしことは本篇に纂錄せし眞語實語に依りて明々了々たるなり、故に南

無歸依佛として釋迦牟尼世尊を三寶中の第一位に置きたまへるにあらずや、然るに祖師滅後の雲孫等は何故に信佛本位の宗乘を擧揚せずして信法本位の宗乘のみを宣揚せしや、信法本位の宗乘は上根上智に適すと雖も、中下根には適應せず、中下根の爲には信佛本位の祖道を光揚せざるべからず、是れ余が茲に信佛本位の宗乘を拈出して、承陽高祖の眞實義を知らしめ、世の一切衆生をして他力眞佛の信者たらしめむとするの衷心至情に外ならざるなり。

○高祖承陽大師の言はく、我れ某甲今身より佛身に至るまで歸依佛歸依法歸依僧と又言く、その歸依する所の法とは善惡無記に非ずして軌則の法なりと、僧は此の軌則を身修心證せし人なり、その軌則とは究竟する所、凡身より佛身に至るの法なるが故に修證の方法なること明かなり、然れば則ち坐禪三昧に住するも、受戒入位に住するも、念佛稱名するも皆是れ凡身より向上して佛身に至るの軌則に外ならず、然るに動もすれば歸依法の法を以て天地の公道宇宙の眞理、法爾法然の軌則なりと誤認する者あれど全く然らず、その歸依する所の法は釋迦牟尼佛大悟の境界より說示したまひし轉迷開悟離苦得樂の軌則なり、その軌則を守りて修證の道に向ふもの誰か釋迦牟尼佛に歸依し釋迦牟尼佛を渴仰し、且つその救濟を仰がずして可ならむや。

然るに本宗の道俗は由來釋迦牟尼佛を本尊としながら之を信ずることの熱烈ならざるは何ぞや、是れ卽ち從來法本位の宗乘のみを宣揚して、佛本位の宗乘を等閑に附したるの餘習なり、その結果として遂に今日の如き殆ど無信無佛の狀態に立至りたるを悲しまずむばあらざるなり、是れ余が信佛護法の餘り本篇を類纂せざるを得ざるに至れるなり。

○抑も因人法重は佛敎本來の原則たり、而して佛滅後正像の二時は行人の道德高かりしが故に如來の正法落地せずして世人の爲に尊重恭敬せられたりと雖も、澆季末代の今日に至りては行人の道德漸く頹墮したるが故に世人其僧に歸依すること篤からず、隨つて正法を輕視し、邪法を愛信するに至れり、人法俱に衰へたるが故に熱烈なる信佛の人甚だ稀なり、然れども佛德の廣大なることは古今に超絕せり、是を以て澆季末代の濁世に於いては佛陀大智の超人格を尊信して我身の救濟を仰ぐは今の時代に適する要法たり、見ずや今の行人たる法孫のもの果して持戒禪定の堅固なることを得べきや否や、余を以て之を見るときは只是れ相似の戒禪なるのみなり、相似の戒禪を以て布敎傳道の方針とすることは

畢竟世間相違の誤謬たるを免かれず、是故に今の世に處して佛法を興隆し信仰を增進せむとするには道俗諸共に信佛を標榜する所の布敎法を安立せざるべからず、是れ本宗に其法無ければ則ち止みなむ、高祖以後全く法藏中に埋沒せられて之を開顯し之を運用すること能はざりしは眞に遺憾の至りなりき、然るに今や時勢と共に法運展開して漸く信佛本位の曙光を見むとするの氣運に向ひたるは欣喜の至りに堪へず、此の氣運に順應して本篇の編纂を見るに至りたるは正しく佛陀の冥鑑祖師の使命なりと信じて疑はざるなり。

○本宗には祖師示寂の後幾度か信界の沿革あり、滅後五六百年間は威儀作法を以て宗門の面目と爲したるが如し、其間に專ら隆盛を極めたるものは前述の如く法本位の禪風なりき、其の禪風の中にもおのづから二種の潮流あり、一は遠路にして一は直截なり、遠路禪は漸修にして直截禪は頓修なり、例へば支那に於ける南頓北漸の如し、又同じ永祖門下に於いても眼藏流の禪と看話流の禪との二種あり、眼藏流に於いては學人をして只管打坐の三昧王三昧に安住せしむるを以て面目とし、看話流に於いては學人をして古則公案を拈提せしむるを以て面目とす、此の兩種共に念佛修懺看經等の信佛を事とせざりき、然れども此れは是れ

入理の深談のみにして門庭の施設なきが故且く受戒入位の法門を開きて在家の男女に化導を試むる事と成り來れり、然れども本尊の統一稱名の一定等は毫も行はれざりき、其他種々の法要行はるゝも其は皆臨機應變の施設にして歸一する所なかりき、是れ則ち明治維新以前までの宗門なりき。

而して今より一百年前蓮藏海玄樓禪師『臨在家語』なるものを著はし、其中に本宗の在家人は宜しく釋迦牟尼佛を以て本尊とせよとの說示なきに非ず、然れども宗門中此書ある事だに知る者稀なり、況や在家の男女に於いてをや。

明治の初年に至りて栖川興巖和尙あり、盛に釋迦一佛の本尊義を唱道する所ありたれども宗門の全體に行はれずして挫折したるは遺憾なりき。

又明治十一年永平寺二代忌の因み宗門の元老碩德の間に布敎法の方針議せられ商量浩々甲論乙駁の末、遂に釋尊一佛稱名成佛のこと衆議一決したり、時に辻顯高和尙之が代表者となり、全責任を負うて『說敎指南』なるものを編述し、普く之を宗門に流布する事となりしは明治十二年頃より十三四年に至りしを見る、然れども當時は世出世共に一大變革時に際し人心動搖して宗意安心等に注意するもの甚だ僅少なりしが爲め遂に立消の姿となりしは千萬の慽みなりき。

又明治十八年に至り、在家化導要義なるものを著はし『清規、廣錄、正法眼藏等の寶典中、遂に一語の在家化導に及びたる者あることなし』との愚論を公にせし人もあり、又は兩本山より宣布せられし宗憲中其の宗敎大意に專修他力一念往生等の文字を羅列せられしこともありき。

又明治二十年に至りては曹洞扶宗會なる布敎の私立團體發表せられ、一時は破竹の勢を以て闔宗を震撼したりき、其中心とする所のものは『洞上在家修證義』といへる法本位の著述なりき、是亦成立に至らずして解散し、その修證義なるものは兩大本山に獻納する事となりぬ、是に於いて永平寺琢宗禪師、總持寺楳仙禪師、之を訂正取捨して『曹洞敎會修證義』と改題し、明治二十四年一月一日より之を宗門全體に普達して本宗化導の標準と規定せられたり、然れども是亦法本位の編纂物にして佛本位にあらざるを見る、その歸趣する所は卽心是佛を認得するに在り、是れ醇乎として醇なる倫理敎に近きものにして他力信佛の救濟を仰ぐべき純宗敎にあらざるが如し故に一定の本尊なく一定の稱名なし、本尊なきが故に本願なく、又その安心歸趣すべき淨土もなく一定不變の依經もなし斯くの如くにして檀信を固結し宗門を興隆せひとするは泰山を挾むで北海を越ゆるの類か、是れ余が此の現狀を坐視傍觀するに忍びず玆に本書を編述して本宗信界の革命を絕叫する所以なり。

○遠磨大師以後に於ける歷代諸祖の語錄法語等を披見するに未だ嘗て永平高祖の如く釋尊一佛に對して恭敬尊重の靈筆を染められたる祖師あるを見ず、是れ唯り永祖の卓見が古今に超絕せる所以なるか、然るに猶上來其が紙墨裡に埋沒して世に顯はれざりしは千萬の慽みなりと雖も大正の今日に至りて之を開顯するに至りたるは全く法運展開の時節到來せしものなるか。

大正七年二月十五日

雲孫比丘　墻外道見謹識

法本位の宗と佛本位の宗

法本位の宗とは何ぞ。曰く禪家諸宗。曰く法相三論倶舍成實。曰く華嚴天台眞言律日蓮是れなり。佛本位の宗とは何ぞ曰く淨土眞宗等の諸派是れなり。然りと雖も淨土諸派が立つる所の佛陀は釋迦牟尼佛陀說法の上に現はれたる佛陀の名相のみなるが故に其實は法佛なり。法佛は方便佛なるが故に佛陀の神變力に依りて化作せられし所のものたり。已に佛陀化作の法佛なるが故に人佛の釋尊と比較すべきものにあらざることは明々白々たり。然るに人佛の釋尊と法佛の諸佛と混同し來れること久し矣。人佛は此の人類社會と交涉濃かなれども。法佛は沒交涉なり。沒交涉なるものを以て沒交涉ならざるものと思へるは至愚の極なり。法佛は人佛釋尊の所說なるが故に敢て之を排する者にはあらず。只法佛を法佛なりと知らずして人佛なりと執する者の執見を破するのみなり。執見は人佛の釋尊にあらずして之を學ぶ末世の凡愚にあるのみ。吾人固より聖者なりと言ふにはあらず。同じく是れ凡愚なり。凡愚なりと雖も聊か以て佛意の存する所を法の如くに解するときは法佛と人佛とを混同すべきにあらず。唯末世の人師が此の差別を知らずして底下の凡愚に之を强いたる淺見を破すると同時に其の强ひられて之を眞に受けたる底下の凡愚を惑れむが故に其の謂はれ無きことを知らしめむとするのみ。法佛は方便佛なるが故に機類に由りては之を信ずるも其の精神を統一する標的物として有害なりと言ふにはあらず。一時的の氣休めとしては有效なるものあらむ。然れども是を以て永久不變的の佛意なりとは斷ずべからず。然るを永恒不可變のものなりと斷ずるものあるは正に是れ執見なり。今や此の執見は人智發達の結果世人普通の常識より破られつゝあり。其の固執者は之を防がむと欲し。世の哲理科學を試金石として怪しき辯護を爲すと雖も其實は自家撞著の自殺論に陷るなり之を要するに法佛本位の既成宗旨は世間學理の爲に其の根柢を失はむとしつゝあり。是れ其の基礎を不徹底なる不了義經の上に置きたるの誤りなり。吾人は之を救はむが爲に眞佛本位の新佛教を建設せむと欲するものなり。彼の法相三論倶舍成實華嚴律宗の如きは法本位の宗旨なりと雖も殆ど皆滅亡の地位に在るものなるがゆゑ敢て之を齒牙に掛くるの要なけれども。眞言禪日の如きは尙餘命を保ちつゝあるがゆゑ。此の諸宗を慫慂して眞佛本位の宗旨たらしめむことを欲すると同時に法佛本位の諸宗を警醒して等しく眞佛本位の宗旨たらしめむことを熱望して止まざるものなり。蓋し其の教團に衣食する僧侶をして覺醒せしむることは容易の業にあらざるがゆゑ。此等の教團に屬する社會大多數の善男善女は無論。惡男惡女に至るまで悉く眞佛釋尊の大慈悲光裡に攝取せしめ以て彼の大自然教たる外道覺教に走る者を防がむとす。

目次

第一章　修德の佛身……一
第二章　發菩提心……三
第三章　懺悔業障……四
第四章　如來正傳の袈裟……六
第五章　釋尊の淨土……一〇
第六章　佛殿の本尊……一一
第七章　釋尊の所在……一二
第八章　釋尊の行持……一四
第九章　禮拜供養の釋尊……一五
第十章　正傳門下の面授……一六
第十一章　法界の中尊……二二
第十二章　娑婆界の主佛……二二
第十三章　佛位の尊貴……二三

第十四章　安居は見佛……二四
第十五章　初心と後心の格量……二五
第十六章　佛と祖との差異……二七
第十七章　小因大果の功德……二八
第十八章　法華經大王……三〇
第十九章　絶對他力觀……三三
第二十章　三寶稱名……四〇
第二十一章　佛智廣大……四四
第二十二章　釋尊の大慈悲……五八
第二十三章　釋尊一佛……六〇
第二十四章　稱名の本據……六六
第二十五章　浴佛上堂……六七
第二十六章　四月八日……六八
第二十七章　臘八上堂……六九
第二十八章　降魔成道……七一

目次（畢）

第二十九章　涅槃會上堂……七一
第三十章　白毫相の功德……七二
第三十一章　眞佛釋尊……七二
第三十二章　慈父世尊……七三
第三十三章　大千の法王……七四
第三十四章　出世の大醫王……七五
第三十五章　拈華瞬目……七六

純法王教と洞宗法王教

純法王教とは如何なるものなるぞ、曰くそれは中間に既成宗旨の祖師に關係なく一超直入的に大聖法王經及び法王教所判の五要素を標準として爲に三身卽一の大聖釋迦牟尼佛に歸依したてまつるものである、其の信佛義としては信仰の歸趣あり法王教概論、法王教活論、法王教極意問答、釋迦如來御和讃、釋迦如來三要經、法王釋尊繪入御傳記、法界一佛篇及び佛教新聞、眞如界等が夫れである、其外は目下編製中である、此等の諸信佛義を一讀再三すれば其の概要を詳かにすることができるのである、然り而して洞宗法王教とは如何なるものなるぞ、曰く此れは日域初祖承陽大師道元禪師の釋尊一佛信仰を標準として三歸の中最も歸依佛の一寶に重きを置いて釋迦牟尼佛に歸依したてまつりて其の救濟を仰ぐのである、その祖意は開闢以來蓋天蓋地に磅礴して餘りあるのであるけれども盲者の見ざるは日月の咎にあらざるが如く、祖師の滅後七百年間は法寶の雲に蓋覆せられて其の祖光を拜することが出來なかつた、卽ち坐禪受戒の法寶のみ盛んに行はれて信佛釋尊の佛寶は祖師の眞意にあらざるが如くに辯解しつゝ居たかの如き感がある、依て評釋永祖釋尊觀は且く法寶中に埋沒し居たるものを收拾拔擢して祖意を誤解しある者の參考に供せむとしたのである、而も此の祖師觀に依りて純法王教を見るに毫も齟齬する所がない、第一本尊を釋迦牟尼佛とすることは佛殿安置の佛陀を釋迦牟尼佛と祖師の定め置かれしは云ふも更なり、血脈相承の室内より觀察するも其他の有らゆる祖語より觀察するも他佛に歸依し他佛の像を安置して可なるの道理を見出すことが出來ぬ、次に釋迦稱名の本據も亦能く祖意に求むることが出來る、永平廣錄、象松道詠は其の本據である、次に復た本願は印度出現五濁度生の聖跡その者が證明して居るのゞ之を經典に求むるも明歷々である、次に復た淨土の觀念は娑婆卽寂光淨土にして不可見の天外地外に求むる化佛の化淨土と雲泥の相違がある、次には依經である、是れには少しく疑惑する者があらう、何となれば三五本の經論に依りて佛滅二千年後に開敎したる經宗と其選を異にし、無依經を以て宗是としたるの傾向あるに依り敢て依經を規定する時は宗義に反するであらうかとの異念を懷くであらう、一應は懼うなれど再應之を考ふるに大迦葉は付法藏の第一祖、達磨は付法藏の第二十八祖、永祖は付法藏の等五十一祖であるから、一代藏經は皆是れ吾宗の法藏に屬するものなるがゆゑ、其中を適宜に拔萃して之を適用するは自由自在である然れども彌陀經、大日經等を適用するは其の本尊義に反するがゆゑ之を用ひぬまでの事である、而して觀音經、地藏經等を用ふるは全く其の適用を誤りたるものと云はねばならぬ、故に本尊佛に直接關係の密々なる此の大聖法王經を用ひたからとて毫も宗義に反せざるのみならず却つて其の妥當を得ると信ずる、是の如く此の五要素を應用すれば洞宗をして信佛本位に復歸せしむるに最適宜なりと信ずるのである。

評註

永祖釋尊觀

高田道見編纂

第一章　修德の佛身

正法眼藏卽心是佛ノ卷ニ曰ク

卽心是佛トハ發心修行菩提涅槃ノ諸佛ナリイマタ發心修行菩提涅槃セサルハ卽心是佛ニアラス（中略）諸佛トハ釋迦牟尼佛ナリ、釋迦牟尼佛ユレ卽心是佛ナリ、過去現在未來ノ諸佛、トモニホトケトナルトキハカナラス釋迦牟尼佛トナルナリ、是レ卽心是佛ナリ。

○評註『永祖は何故にこの示誨ありしか。

抑も卽心卽佛の語は馬祖道一禪師より始まる、當時馬祖の門下に八十餘員の知

識ありたれど、卽心卽佛を了會せし者は一二に過ぎなかつた、如會禪師、法常禪師、の如き人のみありてよく馬祖道を會得せしに過ぎなかつたといふ、唐朝大證國師慧忠和尙は當時の大善知識であつた、其頃彼の南方に於いて禪門が盛大であつたが、南方の知識はみな卽心是佛を誤解し凡夫の見聞覺知を其儘正徧知とし佛性なりと學人に敎へて居た、それは西天竺の先尼外道の妄見に等しいのである。るその妄見に墮するものあらんを恐れてこの開示を垂れたまふたのである。馬祖道の所謂卽心卽佛は性德自然の本覺にはあらず全く修德顯現の佛身にして始覺成就の佛陀を指されたのである、故に諸佛とは釋迦牟尼佛なり釋迦牟尼佛これ卽心是佛なりと示したまふた。然るに明治大正の時代に入りて宇宙の大靈、又は實在、天地の本源を以て直に眞佛なりと誤認するものあるが如きは皆是れ先尼の眷屬である、或は大日を以て法身とし、彌陀も亦法身とし影も形もなき普遍の理體を人格化して佛陀とし信仰の標準とするもの敎者法師、敎相學者の中に少なからぬ、禪者の多くも亦この僻見に墮してゐる苟くも永祖の兒孫たる者は宜しく骨に鏤め膚に銘じて自然外道の群に入らざらんことを冀ふ。

第二章　發菩提心

◎同、谿聲山色ノ卷ニ曰ク

モシ菩提心ヲオコシテノチ六趣四生ニ輪轉ストイヘトモ、ソノ輪轉ノ因緣ミナ菩提ノ行願トナルナリ、シカアレハ從來ノ光陰ハタトヒムナシクスコストイフトモ、今生ノイマタスキサルアヒタニイソキテ發願スヘシ、ネカハクハ、ワレト一切衆生ト今生ヨリ乃至生生ヲツクシテ正法ヲキクコトアラン、キクコトアラントキ、正法ヲ疑著セシ不信ナルヘカラス、マサニ正法ニアハントキ世法ヲスステテ佛法ヲ受持セン、ツヒニ大地ノ有情トトモニ成道スルコトヲエン」カクノコトク發願セルオノツカラ正發心ノ因緣ナラン、コノ心術懈倦スルコトナカレ。

○評註『所謂正法とは釋迦牟尼佛の說かせ給ひし正法である、佛法も釋迦牟尼佛の說かせ給ひし正法にして更に餘敎餘法を指したまふたのではない、故に成

道といふも餘道にあらず、まさしく佛道を成就することである、心術もまた佛佛の相傳し來りたまひし佛心佛光明である。

第三章　懺悔業障

◎同、谿聲山色ノ卷ニ曰ク

心モ肉モ懈怠ニモアリ不信ニモアランニハ誠心ヲモハラシテ前佛ニ懺悔スヘシ、恁麼スルトキ前佛ニ懺悔ノ功德力、ソレヲスクヒテ清淨ナラシム、コノ功德ヨク無礙ノ淨信精進ヲ生長セシムルナリ、淨信一現スルトキ自他オナシク轉セラルルナリ、ソノ利益アマネク情非情ニカフムラシム。

○評註』世に對衆懺悔、人前懺悔の二種ありといへども开は正しからず余は佛前卽ち畫佛木佛金佛泥佛等の像前に於いて懺悔の誠意を捧ぐべきものなりと思ふ、大師釋尊は天上人間の大導師に在しますゆゑ我等を救ひて心地淸淨ならしめたまふ所の力まします、末世の凡夫僧は設ひ智德すぐれたりといふとも證果の羅漢にだも及ぶものがない、故に受戒儀式の時も佛前に懺悔せしむべきである。

ソノ大旨ハ、ネカハクハワレタトヒ過去ノ惡業オホクカサナリ障道ノ因緣アリトモ佛道ニヨリテ得道セリシ、諸佛諸祖ワレヲアハレミテ業累ヲ解脫セシメ、學道ニサハリナカラシメ、ソノ功德法門アマネク無盡法界ニ充滿彌綸セラン、アハレミヲワレニ分布スヘシ、佛祖ノ往昔ハ吾等ナリ、吾等カ當來ハ佛祖ナラン、佛祖ヲ仰觀スレハ一佛祖ナリ、發心ヲ觀想スルニモ一發心ナルヘシ、アハレミヲ七通八達センニ得便宜ナリ落便宜ナリ、コノユエニ龍牙ノイハク、昔生未了今須了、此生度取累生身、古佛未悟同今者、悟了今人卽古人、シツカニコノ因緣ヲ參究スヘシ、コレ證佛ノ承當ナリ、カクノコトク懺悔スレハカナラス佛祖ノ冥助アルナリ、心念身儀發露白佛スヘシ、發露ノナカラ罪根ヲシテ銷殞セシムルナリ、コレ一色ノ正修行ナリ、正信心ナリ、正信身ナリ。

○『評註』諸佛とあれど必ずしも多佛の意味ではない、諸は漢文の規則として呼掛の言葉である、故に諸佛は釋迦牟尼世尊一佛なりと參究すべきである、祖は歴代の祖師にて世尊の正法を單傳したまひし地上の菩薩である、吾等凡夫が佛祖に對する態度は戒經に所謂「我は是れ已成の佛、汝は是れ當成の佛なり」との意味を敷衍したまふたので、初心の菩薩は已成の佛祖に懺悔禮拜して潛にその冥助の他力を頼まなくてはならぬ、頼めば必ず感應道交して冥助を被ふるのである永祖の深意また全く茲に在しましゝことを確信すべきである、而も懺悔の儀則として華嚴經に佛の說かせたまひし懺悔の文を用ふるは永祖門下の古儀である。

第四章　如來正傳の袈裟

◎同、袈裟功德ノ卷ニ曰ク

如來世尊ノ衣法正傳セル法ニアヒタテマツレル宿殖般若ノ大功德力ナリ、イマ末法惡時世ハオノレカ正傳ナキヲハチス、佗ノ正傳アルヲソネム、オモハクハ魔黨ナラン、オノレカイマノ所住ハ前業ニヒカレテ眞實ニアラス、タタ正傳ノ佛法ニ歸敬セン、スナハチオノレカ學佛ノ實歸ナルヘシ、オホヨソシルヘシ、袈裟ハコレ諸佛ノ恭敬歸依シマシマストコロナリ、佛身ナリ佛心ナリ解脫服ト稱シ、福田衣ト稱シ、無上衣ト稱シ、忍辱衣ト稱シ、如來衣ト稱シ、大慈大悲衣ト稱シ、勝幢衣ト稱シ、阿耨多羅三藐三菩提衣ト稱ス、マサニカクノコトク受持頂戴スヘシ。

○『評註』如來世尊は伽耶成道の釋尊にして此の人界に出現したまはざる化佛化如來にあらざることは此の袈裟功德によりて明々了々である、吾等かたじけなくも衣法正傳の門下に出家せしは宿殖善根の大功德である、然るを嫌ひ然るを脫ぎて俗衣を纒ふものあるは悲むべきである。

菩提心ヲオコサントモカラ、カナラス祖佛ノ正傳ヲ傳受スベシ、ワレラアニカタキ佛法ニアヒタテマツルノミニアラス、佛袈裟正傳ノ法孫トシテ、コレヲ見聞シ學習シ、受持スルコトヲエタリ、スナハチコレ如來ヲミタテマツルナリ、佛說法ヲキクナリ、佛光

明ニテラサルルナリ、佛受用ヲ受用スルナリ、佛心ヲ單傳スルナリ、佛髓ヲエタルナリ、マノアタリ釋迦牟尼佛ノ袈裟ニオホハレタテマツルナリ、釋迦牟尼佛マノアタリワレニ袈裟ヲサツケマシマスナリ、佛ニシタカヒタテマツリテ、コノ袈裟ヲウケタテマツレリ。

○『評註』この釋迦牟尼佛の袈裟を其身に受持しつゝ眞佛を他に求めんとするものは被袈裟の賊である、背恩不知の畜類である、更に悲華經の文を引用したまひて曰く。

マコトニソレ袈裟ハ三世諸佛ノ佛衣ナリ、ソノ功德無量ナリトイヘトモ釋迦牟尼佛ノ法ノナカニシテ袈裟ヲエタランニハ餘佛ノ法ノナカニシテ袈裟ヲエンニモスクレタルヘシ、ユヱイカントナレハ釋迦牟尼佛ムカシ因地ノトキ大悲菩薩摩訶薩トシテ寶藏佛ノミマヘニテ五百大願ヲタテマシマストキ、コトサラ

ユノ袈裟ノ功德ニオキテ、カクノコトク誓願ヲオコシマシマス、ソノ功德サラニ無量不可思議ナルヘシ、シカアレハスナハチ世尊ノ皮肉骨髓イマニ正傳スルトイフハ袈裟衣ナリ、正法眼藏ヲ正傳スル祖師カナラス袈裟ヲ正傳セリ、コノ衣ヲ傳持シ頂戴スル衆生カナラス二三生ノアヒタニ得道セリ。

○『評註』釋迦牟尼佛の外あらゆる佛菩薩は設ひ幾千萬億ありといふと雖も、皆是れ理想の化佛化菩薩なるが故に正傳の袈裟があらう筈なし、然るに彌陀大日等を本尊とする宗旨の僧輩はそも何れの所より其の袈裟を正傳せしか、正傳なき袈裟法衣は全く僞物である、彌陀佛何れの時にか袈裟を正傳せしぞ、大日如來何れの時にか袈裟を傳付せしぞ、憐れなるかな餘宗派の袈裟法衣、然るに正傳門下は人から人へと面授正傳の信衣として必ず袈裟を正傳し來れるのである、その沙彌に與へ在家人に與ふるも皆是れ佛光明裏の信衣を分付するのである。

尙又『傳衣の卷』に曰く「ワカ大師釋迦牟尼如來、正法眼藏無上菩提ヲ摩訶迦葉ニ附授スルニ佛衣トモニ傳授セシヨリ嫡々相承シテ曹谿山大鑑師ニイタルニ三十

三代ナリ、ソノ體色量を親見親傳セルコト、家門ヒサシクツタハレテ受持イマニアラタナリ」と祖師の自信は斯くの如くである、中途より經論を披閲して開きし宗旨の袈裟は正傳に非ず模擬衣であることを憫笑すべきである。

永祖の眼中には釋迦大師のみ在しまして餘佛を見たまふことは夢の如く幻の如くである、永祖の兒孫たる者は宜しく永祖の如く釋尊を信念すべきである。

第五章　釋尊の淨土

◎同、法華轉法華ノ卷ニ曰ク

常住此説法ナル開示悟入アリ、方便現涅槃ナル開示悟入アリ、而不見ノ雖近ナルタレカ一心ノ會不會ヲ信セサラン、天人常充滿ノトコロハスナハチ釋迦牟尼佛毘盧遮那ノ國土常寂光土ナリ、オノツカラ四土ヲ具スルワレラスナハチ如一ノ佛土ニ居スルナリ。

○評註　淨土は衆生の遊樂する所であるけれども土石山河の國土を指したものではない、これは釋迦牟尼佛唯心の淨土にして卽ち佛境界である、天人常充滿とあればとて彼の理想畫に示したるが如きものではない、天は十地の菩薩にして人は三十心(三賢)の菩薩である、釋迦牟尼佛は妙覺果滿の佛位にして开が直に法身毘盧遮那佛の安住したまへる常寂光土である、四土は寂光、實報、方便、同居を云ふ、同居は染淨凡夫安心の淨土、方便は漸く見思二惑を盡くせる二乘所感の化淨土、實報は初地以上に安住する菩薩の所感、寂光は卽ち唯佛法身の理土である、法身として眞言敎者のいへるが如き漠々茫々たる天地宇宙の實在とか理體とかいへる如きものをいふのではなく、釋迦牟尼佛といへる人格の本地本覺が直に毘盧の法身である、久しく淨業を修して得たまへる斷德の清淨法身である、これは釋迦牟尼佛內證の理體にして、始覺の智を全ふして本覺の理に冥合したる非思量の佛境界であると知らねばならぬ。

第六章　佛殿の本尊

◎同、看經ノ卷ニ曰ク

佛殿ノ釋迦佛ノマヘニ連床ヲ二行ニシク、イハユル東西ニアヒムカヘテオノオノ南北行ニシク、東西牀ノマヘニ臺盤ヲタツ、ソ

ノ上ニ經ヲ安ス、金剛般若經、仁王經、法華經、最勝王經、金光明經等ナリ。

○『評註』七堂伽藍の中に佛殿なるものがある、これは如何なる佛陀を奉安すべきであるかは、この祖訓によりて釋迦牟尼佛なることが明々白々である、何でも勝手の佛體を安置すべきものではない、然るを今の禪者中洞宗の本尊は何でもよいといふ者がある、思も亦甚しい、宗制に定むると否とに拘はらず、祖訓已に斯くあるからには毫も爭ふの餘地がない、寺院の佛前已に然りとせば其の流れを汲む在家の佛壇に奉安すべき本尊佛は釋迦佛に定まりをるのである。

第七章　釋尊の所在

◎同、行佛威儀ノ卷ニ曰ク

アルヒハイフ、タタ人道ノミニ諸佛出在スサラニ餘方餘道ニハ出世セストオモヘリ、イフカコトクナラハ佛在ノトコロミナ人道ナルヘキカ、コレハ人佛ノ唯我獨尊ノ道得ナリ、サラニ天佛モアルヘシ、佛佛モアルヘキナリ、諸佛ハ唯人間ノミニ出現ストイハンハ佛祖ノ閫奧ニイラサルナリ。

祖宗イハク、釋迦牟尼佛、自從迦葉佛所傳正法、往兜率天、化兜率陀天、于今有在、マコトニシルヘシ、人間ノ釋迦ハコノトキ滅度現ノ化ヲシケリトイヘトモ、上天ノ釋迦ハ于今有在ニシテ化天スルモノナリ、學人シルヘシ人間ノ釋迦ノ千變萬化ノ道著アリ說著アルハ人間一隅ノ放光現瑞ナリ、オロカニ上天ノ釋迦、ソノ化サラニ千品萬品ナラン、シラサルヘカラス、佛々正傳セル宗旨ヒトリ佛道(正傳の)ノミニ正傳セリ自餘ノ諸類シラスキカサル功德ナリ。

○『評註』釋尊は三界の大導師に在しますがゆゑ、人間界にのみ止まりたまふべきにあらざることは、壽量品偈の文にても明了する所である、即ち、「餘國有衆生、恭敬信樂者、我復於彼中、爲說無上法、汝等不聞此、但謂我滅度」と故に天上にも他方の國土にも往いて敎化したまふべきである、又涅槃經後分に云く「爾時世尊娑羅林下寢臥寶牀、於其中夜、告衆曰、我今時至、卽入禪定、自初禪入二禪三禪、往反二十七返、復告衆入四禪、寂然無聲示涅槃相」と、是に由て之を觀るに釋尊は滅後四禪天に入

らせられたやうにもある、この娑婆國土は釋尊教化の領分なるがゆゑ、十界に身を遍うして衆生を教化したまふと云はねばならぬ、永祖の眞意も亦此意を出でぬものと拜察する。

第八章　釋尊の行持

◎同、行持ノ卷ニ曰ク

慈父大師釋迦牟尼佛、十九歳ノ佛壽ヨリ深山ニ行持シテ三十歳ノ佛壽ニイタリテ大地有情同時成道ノ行持アリ、八旬ノ佛壽ニイタルマテナホ山林ニ行持シ、精籃ニ行持ス、王宮ニカヘラス、國利ヲ領セス、布僧迦黎ヲ衣持シ、在世ニ一經スルニ互換セス一盂在世ニ互換セス、一時一日モ獨處スルコトナシ、人天ノ閑供養ヲ辭セス、外道ノ訕謗ヲ忍辱ス、オホヨソ一化ハ行持ナリ、淨衣乞食ノ佛儀シカシナカラ行持ニアラストイフコトナシ。

○評註『禪門の諸祖中に於いて慈父の二字を釋尊に被らしたる人師は甚だ稀有である、五燈會元中には曾て見ざる所である、永祖は常に其中衆生悉是吾子の佛勅を體したまふがゆゑ他師の如き粗暴なる言語は用ひたまはぬ、吾等兒孫たる者も常に永祖の釋尊觀に慣うて赤子の慈父に縋るが如く願求信順報謝の想ひに住しなくてはならぬ。

第九章　禮拜供養の釋尊

◎同、陀羅尼ノ卷ニ曰ク

マレニ邊地ノ人身ヲウケテ愚蒙ナリトイヘトモ、宿殖陀羅尼ノ善根力現成シテ釋迦牟尼佛ノ法ニウマレアフ、タトヒ百艸ノホトリニ自成佗成ノ諸佛祖ヲ禮拜ストモ、コレ釋迦牟尼佛ノ成道ナリ、釋迦牟尼佛ノ辨道工夫ナリ、陀羅尼神變ナリ、タトヒ無量億千劫ニ古佛今佛ヲ禮拜スル、コレ釋迦牟尼佛衣之所覆時節ナリ、タトヒ袈裟ヲ身體ニオホフハステニコレ得釋迦牟尼佛之身肉手足頭目髓腦光明轉法輪ナリ、カクノコトクシテ袈裟ヲ著スル

ナリ、ユレハ現成著袈裟功德ナリ、ユレヲ保任シ、ユレヲ好樂シテトキトトモニ守護シ搭著シテ禮拜供養釋迦牟尼佛シタテマツルナリ、ユノナカニイク三阿僧祇劫ノ修行ヲモ辨官究盡スルナリ、釋迦牟尼佛ヲ禮拜シタテマツリ供養シタテマツルトイフハ、アルヒハ傳法ノ本師ヲ禮拜シ、剃髮ノ本師ヲ禮拜シ供養スルナリ、ユレスナハチ見釋迦牟尼佛ナリ、以法供養釋迦牟尼佛ナリ、陀羅尼ヲモテ釋迦牟尼佛ヲ供養シタテマツルナリ。

○評註『陀羅尼は梵語、漢には總持と譯す、一字の中に無量の敎文を總攝し、一法の中に一切法を任持し、一義中に一切義を攝し、一聲中に無量功德を藏するが故である、或は呪と譯することもある然れば則ち釋迦牟尼佛の法中に於いて其法を行するは直接ならずと雖も間接に釋迦牟尼佛を禮拜し供養する義に當るのである、これは如來所說の正法を以て直に如來を見たてまつるとするの祖意である。

第十章　正傳門下の面授

◎同、面授ノ卷ニ曰ク

釋迦牟尼佛マノアタリ、迦葉尊者ヲミルユト親付ナリ、阿難羅睺羅トイヘトモ迦葉ノ親付ニオヨハス、諸大菩薩トイヘトモ迦葉ノ親付ニオヨハス、迦葉尊者ノ座ニ坐スルユトヲ得ス、世尊ト迦葉ト同坐シ同衣シキタルヲ一代ノ佛儀トセリ、迦葉尊者シタシク世尊ノ面授ヲ面授セリ、心授セリ身授セリ眼授セリ、釋迦牟尼佛ヲ供養恭敬禮拜奉覲シタテマツレリ、ソノ粉骨碎身イク千萬變トイフユトヲシラス、自己ノ面目ハ面目ニアラス如來ノ面目ヲ面授セリ。

○評註『如來の滅後三五本の經論によりて立敎開宗せしものは面授にあらざるがゆゑ背授ともいふべきである、永平門下は嫡々面授の正宗なるがゆゑ他の敎宗と比肩すべきでない、而して已に自己を忘じて如來の面目を正傳せるがゆゑ全く如來他力の面目である。

釋迦牟尼佛マサシク迦葉尊者ヲミマシマス迦葉尊者マノアタリ阿難尊者ヲミル、阿難尊者マノアタリ迦葉尊者ノ佛面ヲ禮拜ス、コレ面授ナリ、阿難尊者コノ面授ヲ住持シテ商那和修ヲ接シテ面授ス、商那和修尊者マサシク阿難尊者ヲ奉覲スルニ唯面與面授シ面授ス、カクノコトク代代嫡嫡ノ祖師トモニ弟子ハ師ニマミエ、師ハ弟子ヲミルニヨリテ面授シキタレリ、一祖一弟子トシテモ、アヒ面授セサルハ佛佛祖祖ニアラス。(中略)

シカアレハスナハチマノアタリ釋迦牟尼佛ヲマモリタテマツリテ一期ノ日夜ヲツメリ佛面ニ照臨セラレタテマツリテ一代ノ日夜ヲツメリ、コレイク無量劫ヲ往來セリトシラス、シツカニオモヒヤリテ隨喜スヘキナリ、釋迦牟尼佛ノ佛面ヲ禮拜シタテマツリ釋迦牟尼佛ノ佛眼ヲワカマナコニウツシタテマツリ、ワカマナコヲ佛眼ニウツシタテマツリシ佛眼晴ナリ、佛面目ナリ、

コレヲアヒツタヘテイマニイタルマテ一世ニ間斷セス面授シキタレルハコノ面授ナリ。

○評註『永祖の眼中、唯一の釋迦牟尼佛あるのみ、さらに餘佛餘尊ましまさず、故に今の佛法祖法は釋迦一佛の敎法のみにして餘佛の法は見ましまさぬのである。

釋迦牟尼佛ヲ禮拜スルトキ五十一世ナラヒニ七佛祖宗ナラヘルニアラス、ツラナルニアラサレトモ俱時ノ面授アリ、一世モ師ナミサレハ弟子ニアラス、弟子ヲミサレハ師ニアラス。

○評註』七佛世尊の在しますことは吾等の近眼にて見たてまつることを得ざれども、釋尊の佛語によりて且くこれを信ずるのである、今の世は釋尊一佛より外に形迹の見るべきものなしと雖も、今佛の存在を現量として過去の比量界にも諸佛の出現ありしことを信ずるのであると同時に、未來佛の出現あることも否定することが出來ぬのである、故に釋尊一佛を禮拜するとき諸祖に面授禮拜するの道理がある。

マノアタリ釋迦牟尼佛ヲミタテマツル正法ヲ正傳シキタレルハ釋迦牟尼佛ヨリモ親僧ナリ、眼尖ヨリ前後三三ノ釋迦牟尼佛ヲ見出現セシムルナリ、カルカユヱニ釋迦牟尼佛ヲオモクシタテマツリ、釋迦牟尼佛ヲ戀慕シタテマツランハ、ユノ面授正傳ヲオモクシ、尊崇シ難値難遇ノ敬重禮拜スヘシ、スナハチ如來ヲ禮拜シタテマツルナリ、如來ニ面授シタテマツルナリ。

○『評註』永祖の釋尊を戀慕し渴仰しまします事は此文にても其深意を窺ふに足る、斯くの如く信順してこそ佛弟子佛信徒の面目を全ふし得らるゝのである。

八塔ヲ禮拜スルモノハ罪障解脫シ道果感得ス、コレ釋迦牟尼佛ノ道現成處ヲ生處ニ建立シ、轉法輪處ニ建立シ、成道處ニ建立シ涅槃處ニ建立シ、曲女城邊ニノユリ、菴羅會林ニノユレル大地ヲ成シ大空ヲ成セリ、乃至聲香味觸法色處等ニ塔成セルヲ禮拜スルニヨリテ道果現成ス、ユノ八塔ヲ禮拜スルヲ西天竺ノアマネキ勤修トシテ在家出家天衆人衆キホフテ禮拜供養スルナリ、ユレスナハチ一卷ノ經典ナリ、佛經ハカクノ如シ、イハンヤマタ三十七品ノ法ヲ修行シテ道果ヲ箇箇生生ニ成就スルハ釋迦牟尼佛ノ亙古亙今ノ修行修治ノ蹤跡ヲ處處ノ古路ニ流布セシメテ古今ニ歷然セルカユヱニ成道ス、シルヘシカノ八塔ハ層層ナル霜華イクハクカアラタマル風雨シハシハヲカサントスレト空ニアトセルソノ功德ヲイマノ人ニヲシマサルコト減少セス、カノ根力覺道イマ修行セントスルニ煩惱アリ惑障アリトイヘトモ修證スルニソノヲカラナホイマアラタナリ、釋迦牟尼佛ノ功德ソレカクノユトシ、イハンヤイマノ面授ハカレラニ比準スヘカラス、カノ三十七品菩提分法ハコノ佛面佛心佛身佛道佛光佛舌等ヲ根元トセリカノ八塔ノ功德聚マタ佛面等ヲ本基トセリ。

○『評釋』一は迦毘羅城龍彌園に在り、二は摩訶陀國尼連禪河邊に在り、三は波

羅奈城に、四は舍衞國の祇陀園に、五は曲女城に、六は王舍城に、七は廣嚴城に、八は拘尸那城にありとは八大靈塔經にある、これ皆八王が佛德を戀慕渴仰するの餘り、その舍利を分受して建立し禮拜供養し奉つたのである、

この八塔を禮拜するだに罪障を解脫することが出來るとあるからに、自から朝暮釋尊の靈體を禮拜する功德は廣大無邊なものである。

第十一章　法界の中尊

◎同梅華ノ卷ニ曰ク

梅華ヲ究盡スルニサラニ疑著スヘキ因緣イマタキタラス、ユレステニ天上天下唯我獨尊ノ眼睛ナリ、法界中尊ナリ。

○評註『釋尊はキリストの如く己れより外に尊貴なる天神ましますと說きたまはず、天地法界の中に自から獨尊なりと宣言したまふた、故に梵天帝釋も四大天王も天龍八部も皆來つて聞法したのである、今は世尊を以て老梅樹に比したもの。

第十二章　娑婆界の主佛

◎同、十方ノ卷ニ曰ク

釋迦牟尼佛告大衆言、十方佛土中唯有一乘法イハユル十方ハ佛土ヲ把來シテコレヲナセリ、ユノユエニ佛土ヲ拈來セサレハ十方イマタアラサルナリ、佛土ナルユエニ以佛爲主ナリ、ユノ娑婆國土ハ釋迦牟尼佛土ナルカユトシ。

○評註『すでに是れこの娑婆國土釋迦牟尼の佛土なるが故に、釋尊の拈來したまひし十方の佛土は釋迦牟尼佛の一句語に呑却せられたのであるから、十方佛土といふと雖も實は釋尊一佛の所領である餘尊ましますと說きたまふと雖も其實は一佛の化土である、一佛の化土なるが故に唯有一乘法無二亦無三と說きたまふた故に天上天下四維十方の中、釋迦牟尼佛より尊なるものなく貴なるものもない。

第十三章　佛位の尊貴

◎同、菩提分法ノ卷ニ曰ク

大師釋尊カタシケナク父王ノ位ヲスステテ嗣續セサルユトハ王

位ノ貴ナラサルニアラス佛位ノ最貴ナルヲ嗣續センカタメナリ、佛位ハコレ出家位ナリ、三界ノ天衆生人衆生トモニ頂戴敬恭スルクラヰナリ、梵王釋王ノ同坐スルトコロニアラス、イハンヤ下界ノ諸人王諸龍王ノ同坐スルクラヰナランヤ無上正等覺位ナリ、クラヰヨク說法度生シ放光現瑞ス

○『評註』この天上地下に於いて尊貴なる中に最尊貴なるは大師釋尊なるが故に、天上天下無如佛、十方世界亦無比、世間所有我盡知、一切無有如佛者とこれは釋尊が因地にましましゝ時弗沙佛の出現に値ひ七日七夜翹足にしてかの佛を讚歎したまひし偈文(菩薩本行經)である、釋迦牟尼佛の最尊貴なるも亦斯の如きものと參すべきである。

第十四章　安居の見佛

◎同、安居ノ卷ニ曰ク

マサシク佛在世ノ安居ヨリ嫡嫡面授シキタレルカユヱニ佛面祖面マノアタリ正傳シキタレリ、佛祖身心シタシク證契シキタレリカルカユヱニイフ安居ヲミルハ佛ヲミルナリ、安居ヲ證スルハ佛ヲ證スルナリ、安居ヲ行スルハ佛ヲ行スルナリ、安居ヲキクハ佛ヲキクナリ、安居ヲナラフハ佛ヲ學スルナリ、オホヨソ九旬安居ハ諸佛諸祖イマタ違越シマシマササル法ナリ、シカレハスナハチ人王、釋王、梵王等比丘僧トナリテタトヒ一夏ナリトイフトモ安居スヘシ、ソレ見佛ナラン、人衆天衆龍衆タトヒ一九旬ナリトモ比丘比丘尼トナリテ安居スヘシ、スナハチ見佛ナラン、佛祖ノ會ニマシハリテ九旬安居シキタレルハ見佛來ナリ。

○『評註』永祖の佛位を讚歎したまふことは此等の御文にても其の一端を窺ふに足る、臨濟雲門の所見と天地雲泥である。

第十五章　初心と後心の格量

◎同、發菩提心ノ卷ニ曰ク

迦葉菩薩、偈ヲモテ釋迦牟尼佛ヲホメタテマツルニイハク（涅槃經）

發心畢竟二無別、如是二心先心難、自未得度先度他、是故我禮初發心、初發已爲天人師、勝出聲聞及緣覺、如是發心過三界、是故得名最無上。

發心トハハシメテ自未得度先度他ノ心ヲオコスナリ、コレヲ初發菩提心トイフ、コノ心ヲオコスヨリノチ、サラニソコハクノ諸佛ニアヒタテマツリ、供養シタテマツルニ見佛聞法シサラニ菩提心ヲオコス、雪上加霜ナリ、イハユル畢竟トハ佛果菩提ナリ、阿耨多羅三三藐菩提ト初發菩提心ト格量セハ劫火螢火ノコトクナルヘシトイヘトモ、自來得度先度他ノ心ヲオコセハ二無別ナリ毎自作是念、以何令衆生、得入無上道速成就佛身ユレ卽チ如來ノ壽量ナリ、ホトケハ發心修行證果ミナカクノコトシ。

○『評註』佛位の後心は劫火の如く廣大なるべく、初發の菩提心は螢火の如く小量なるが故に縱ひ理に於いて初後一致なりといふといへども、佛果位の尊重なることを知りて釋尊の絶對無限なることを知らねばならぬ、祖師の深意も亦全くこれに外ならぬ。

第十六章　佛と祖との差異

◎同、發菩提心ノ卷ニ曰ク

禪苑清規一百二十問云、發悟菩提心否、アキラカニシルヘシ、佛祖ノ學道カナラス菩提心ヲ發悟スルヲサキトセリトイフコト、ユレスナハチ佛祖ノ常法ナリ、發悟ストイフハ曉了ナリ、ユレ大覺ニハアラス、タトヘ十地ヲ頓證セルモナホユレ菩薩ナリ、西天二十八祖、唐土六祖等オヨヒ諸大祖師ハユレ菩薩ナリ、ホトケニアラス、聲聞辟支佛等ニアラス、今ノ世ニアル參學ノトモカラ菩薩ナリ、聲聞ニアラストイフコト、アキラメシレルトモカク一人モ

ナシ、ダタミタリニ衲僧衲子ト自稱シテ、ソノ眞實ナシラサルニヨリテミタリカハシクセリ、アハレムヘシ澆季祖道廢セルコトヲ。

○『評註』大覺位はこれ佛である、歴代祖師の大賢なるも未だ佛に及ばず、佛位と祖位との差別あることを知らねばならぬ。

第十七章　小因大果の功德

◎同、供養諸佛ノ卷ニ曰ク

法華經曰、若人於塔廟、寶像及畫像、以華香旛蓋、敬心而供養、若使人作樂、擊鼓吹角唄、簫笛琴箜篌、琵琶鐃銅鈸、如是衆妙音、盡持以供養、或以歡喜心、歌唄頌佛德、乃至一小音、皆已成佛道、若人散亂心、乃至以一華、供養於畫像、漸見無數佛、或有人禮拜、或復但合掌、乃至舉一手、或復少低頭、以此供養像、漸見無量佛、自成無上道、廣度無數衆、ユレスナハチ三世諸佛ノ頂顙ナリ、眼睛ナリ、見賢思齊ノ猛利精進スヘシ、イタツラニ光陰ヲワタルコトナカレ、石頭無際大師イハク、光陰莫虛度カクノコトキノ功德ミナト成佛ス、過去現在未來オナシカルヘシ、サラニ二アリ三アルヘカラス、供養佛ノ因ニヨリテ作佛ノ果ヲ成スルコトカクノコトシ。

龍樹祖師曰、如求佛果、讃歎一偈、稱一南謨、燒一捻香、奉獻一華、如是小行、必得作佛、コレヒトリ龍樹祖師菩薩ノ所說トイフトモ歸命シタテマツルヘシ、イカニイハンヤ大師釋迦牟尼佛說ヲ龍樹祖師正傳擧揚シマシマストコロナリ、ワレライマ佛道ノ寶山ニノホリ、佛道ノ寶海ニイリテサイハイニタカラヲトレル、モトモヨロコフヘシ、曠劫ノ供佛ノチカラナルヘシ、必得作佛ウタカフヘカラス決定セルモノナリ、釋迦牟尼佛ノ所說カクノコトシ。

復次有小因大果、小緣大報、如求佛道、讃一偈、一稱南無佛、燒一捻香、必得作佛、何況聞知諸法實相、不生不滅不不生不不滅而行因果業

亦不失、世尊ノ所說カクノコトクアキラカナルヲ龍樹祖師シタシク正傳シマシマスナリ、誠諦ノ金言、正傳ノ相承アリ、タトヒ龍樹祖師ノ所說ナリトモ餘師ノ說ニ比スヘカラス、世尊ノ所示ヲ正傳流布シマシマスニアフコトヲエタリ、モツトモヨロコフヘシ、コレラノ聖教ヲミタリニ東土ノ凡師ノ虛說ニ比量スルコトナカレ。

第十八章　法華經大王

◎同、歸依三寶ノ卷ニ曰ク

法華經曰、是諸罪衆生、以惡業因緣、過阿僧祇劫、不聞三寶名、法華經ハ諸佛如來ノ一大事因緣ナリ、大師釋尊所說ノ諸經ノナカニハ法華コレ大王ナリ、大師ナリ、餘經餘法ハミナコレ法華ノ臣民ナリ眷屬ナリ、法華經中ノ所說コレマコトナリ、餘經中ノ所說ミナ方便ヲ帶セリ、ホトケノ本意ニアラス、餘經中ノ說ヲキタシテ法華經ニ比較シタテマツランコレ逆ナルヘシ、法華經ノ功德力ヲカフムラサレハ餘經アルヘカラス餘經ミナ法華ニ歸投シタテマツランコトヲマツナリ、コノ法華經ノナカニイマノ說マシマス、シルヘシ三寶ノ功德マサニ最尊ナリ最上ナリトイフコトヲ

○評註『佛法僧三寶の中の佛は如何なる佛であらうか、釋尊の佛なることは明白であるが、この佛寶の中には餘佛も含めてあるのであらうか、佛みづから我に歸依せよと宣言したまふたのであらうか、これに就いては四種の三寶がある、永祖みづから此卷に示したまう、て曰く。

○住持三寶、形像塔廟佛寶、黃紙朱軸所傳法寶、剃髮染衣戒法儀相僧寶。

○化儀三寶、釋迦牟尼世尊佛寶、所轉法輪流布聖敎法寶、阿若憍陳如等五人僧寶。

○理體三寶、五分法身名爲佛法、滅諦無爲名爲法寶、學無學功德名爲僧寶。

○一體三寶、證理大覺名爲佛寶、清淨離塵名爲法寶、至理和合無擁無滯名爲僧寶。

この四種の三寶は共に歸依すべきものなれども今は住持の三寶を通して化儀の三寶に歸依するを先とすべきである。

所謂その形像は釋尊にして、その靈も亦釋尊である、永祖の所信亦此にある。

高祖示して云く「イマ如來滅後後五百歳ノトキ人天イカカセン、シカアレトモ如來形像舍利等ナホ世間ニ現住シマシマスコレニ歸依シタテマツルニマタカクノコトクノ功德ヲウルナリ」と、かくのごとしとは前文に「オホヨソ三歸ノチカラ三惡道ヲハナルルノミニアラズ天帝釋ノ身ニ還入ス、天上ノ果報ヲウルノミニアラズ須陀洹ノ聖者トナル」と之を受けたまふたのである、佛弟子といひ佛信者といふは三寶に歸依せしものをいふ、されど無宿善根の輩は歸依することができぬ、歸依するといふは感應道交である、感應道交せざれば歸依するものでない、故に高祖示して曰く「歸依セザレバ恭敬セズ恭敬セザレバ歸依スベカラズ、コノ歸依佛法僧ノ功德カナラズ感應道交スルトキ成就スルナリ、タトヒ天上人間地獄鬼畜ナリトイヘドモ感應道交スレバカナラズ歸依シタテマツルナリ、スデニ歸依シタテマツルガゴトキハ生生世世在在處處ニ增長シ、カナラズ積功累德シ阿耨多羅三藐三菩提ヲ成就スルナリ」と感應道交せざるものは終に外道魔黨に入りて三寶の名字だも聞きたてまつる事ができぬ。

第十九章　絶對他力觀

◎同、生死ノ卷ニ曰ク、

タタ生死スナハチ涅槃トコヽロヘテ、生死トシテイトフヘキモノナク、涅槃トシテネカフヘキモノナシ、コノトキハシメテ生死ナハナル分アリ。

○『評註』小乘はこの三界生死を離れ、再び此の人界に生れ來ぬことを希望してゐる、これを灰身滅智の涅槃といふ、その涅槃に入りたる後は何になるのであるか、それは阿羅漢になるので佛や菩薩になるといふのではない、これを偏眞空理の佛法といふ、然るに大乘は然らず、この生死をば無體卽空と觀じ、この生死を離れずして涅槃寂靜の境界を得やうとするのである、その得た境界は何であるかといふに、そは菩薩である、菩薩は佛種子として佛に成る所の階級である、この階級は十信より始まりて五十一位ある、永祖の主張はまさしく此の菩薩法である、菩薩の萬行は四攝法、四無量心、六度波羅密である、これを行するには久しく生死に入りて利他の行願を成就しなくてはならぬ、故に聲聞の如く一向に生死を離れんとしたのでは自身の安樂のみを得るに在りて他の衆生を濟度することがで

きぬのである、然るに自利利他圓滿しなければ佛に成ることができぬのであるからこの生死を捨てずして涅槃を求むるのがこの菩薩行である、心がその涅槃にあればこの生死は有りの儘の有り潰れとなる、これを生死透脱といふのである

生ヨリ死ニウツルトコロウルハユレアヤマリナリ、生ハヒトトキノクラキニテステニサキアリノチアリ、カルカユエニ佛法ノナカニハ生スナハチ不生トイフ、滅モヒトトキノクラキニテ、マタサキアリノチアリコレニヨリテ滅スナハチ不滅トイフ。

○評註『太陽の東天より出づるは生の如く、西山に入るは死の如くである、けれども太陽その物には出もなく沒もない、人も亦その通り母胎より出づるは生の如く、墓穴に入るのは死の如くである、けれども過去の先もあり未來の後もある身心の本躰に於いて增減はない、故に現成公案の卷に示したまひて曰く、

タキギハ、ハイトナル、サラニカヘリテタキギトナルベキニアラズ、シカアルヲ灰ハノチ薪ハサキト見取スベカラズ、シルベシ薪ハ薪ノ法位ニ住シテサキアリノチアリ前後アリトイヘドモ前後際斷セリ、灰ハ灰ノ法位ニアリテ後アリ先アリ

カノ薪ハイトナリヌルノチ、サラニ薪トナラザルガゴトク、人ノシシタルノチ、サラニ生トナラズ、シカアルヲ生ノ死ニナルトイハザルハ佛法ノサダマレルナラヒナリ、コノユエニ不生トイフ、死ノ生ニナラザル、法輪ノサダマレル佛轉ナリ、コノユエニ不滅トイフ、生モ一時ノクラキナリ、死モ一時ノクラキナリ、タトヘバ冬ト春トノゴトシ、冬ノ春トナルトオモハズ、春ノ夏トナルトイハヌナリ」と前後あれども前後あるにあらず、生死あれども生死なしと見るのが是法住法位世間相常住の實相である、この實相を體驗するとき始めて生死を解脱して常住寂滅の涅槃に住するのである。

生トイフトキニハ、生ヨリホカニモノナク、滅トイフトキハ滅ノホカニモノナシ、カルカユエニ生キタラハタタコレ生、滅キタラハユレ滅ニムカヒテツカフヘシトイフコトナカレ、ネカフコトナカレ。

○評註『生也全機現、死也全機現』といふもの、これを一時の位といふ高祖は亦「生死ヲ生死ニマカス」とも「生死去來唯是生死去來」とも仰せられた。

ユノ生死ハスナハチ佛ノ御イノチナリ、ユレヲイトヒステントスレハ、佛ノ御イノチヲウシナハントスルナリ、ユレニトトマリテ生死ニ著スレハ、ユレモ佛ノ御イノチヲウシナフナリ、佛ノアリサマヲトトムルナリ、イトフユトナク、シタフユトナキ、ユノトキハシメテ佛ノユユロニイル。

○評註』此に佛といふは釋迦牟尼佛の事である、釋迦牟尼佛が甚大久遠の昔より娑婆往來八千返、衆生の爲の故に結緣敎化したまひしは全くこの生死を活用したまふたのである、尙は未來永劫に生死に往來して娑婆界の衆生を敎化したまふので大悲心は全く如來の御壽命である、又一切衆生も二乘の如く此の生死は厭ふべきものぞと斷念して不生不死の涅槃界に入つて了ふたならば、菩薩の利他行も如來の大悲も斷絕して了ふことになる、されば此の生死に深く執着して佛の敎化を受けぬことにならば、これも亦佛の御壽命を失ふ義になる、故に生死は生死にまかせて厭はず、涅槃は涅槃にまかせて二乘の如く慕はず著せずして其の中道を歩むものが卽ち吾等の安心すべき所である、故に厭うても厭

ふべきは娑婆なりとて頻りに往生淨土を勸むる淨土敎徒の如く厭世一方に傾くは永祖の安心でない又欣うても欣うべきは娑婆なりとて安りに快樂主義に偏する自然主義者の如きはまた禪徒の安心でない、厭はず慕はざる所に於いて求むべきが卽ち永祖の安心である、

タタシ心ヲモテハカルユトナカレ、ユトハヲモテイフユトナカレ、タタワカ身ヲモ心ヲモハナチワスレテ、佛ノイヘニナケイレテ、佛ノカタヨリオユナハレテ、ユレニシタカヒモテユクトキ、チカラヲモイレズユユロヲモツヒヤサスシテ生死ヲハナレ佛トナル、タレノ人カユユロニトトトユホルヘキ。

○評註』心をもて圖るのも自力である言語をもて云ふのも自力である、身心を放下し脫落する時、此に始めて釋迦牟尼佛の大圓覺伽藍に入り、その洒々落々たる活生涯の活身心を獲得するのである、此れは自力の妄想分別を以て獲得したのではなく、全く此の身心を如來にまかせたてまつりて無我相無人相になつたから身を捨てゝこそ浮ぶ瀨もありで、如來より此に活骨髓を與へられたといふ

べきである、この活生涯は全く如來の賜である、此の身心を如來にまかせたてまつるは、禪語の所謂大死一番である、蘇息一聲して大活現成したるは、佛のかたよりおこなはれたので微塵毫末ばかりも凡夫自己の分別ではない、これを如來の他力といふ、凡夫の自己はこの相待界に迷へるもの、釋迦牟尼如來はかの絶對界に遊べるもの、その如來の智慧慈悲の光明に照らさるゝ吾等は、如來の子なるが故に、其救はれたる吾身は全く如來の所有なるが故に絶對の他力といふ。

然るに其の身心を放下し脱落せんと志したるは自力でないかといふ人もあらうがその志は己れ自からが起したのではなく、如來の方より起さしめられたのであるから他力である、チカラヲモイレズ、ココロヲモツヒヤサズシテ……此れは三祖の所謂虛明自照不勞心力、非思量處識情難測といへる非思量の境界である非思量――これを佛境界といふ、非思量の中には文字もなく語言もない、故に經に曰く、「般若波羅密ハ實法ニシテ顚倒セズ、念想觀已ニ除キ、語言ノ法モ亦滅ス」と生死は念想觀である、心意識である、妄想分別である、これを絶するときが生死透脱である、生死は夢想顚倒の迷ひである、これを脱落するは無明長夜の夢が覺めたのである、佛を繇して覺といふは夢の覺めたる人であるからの事である、

生死の夢妄想が覺めて見れば、生死は其儘涅槃である、涅槃は不生不滅である、不滅不生は安樂である、心に滯りあるは苦痛である、滯りなきは安樂である。

佛トナルニイトヤスキミナアリ、モロモロノ惡ヲツクラス、生死ニ著スルトコロナク一切衆生ノタメニアハレミフカクシテ、カミナウヤマヒ、シモヲアハレミ、ヨロツヲイトフココロナク、ネカフココロナクテ、心ニオモフコトナク、ウレウルコトナキ、コレヲ佛トナツク、マタホカニタツヌルコトナカレ。

○評註『此にほとけといふは果佛の事ではない、發心滿位の佛である、華嚴經に所謂初發時便成正覺の佛である、信位獲得の佛である、果滿圓成の大覺佛ではない、これを因位の佛といふ、これを因中說果といふ、何となれば此の因佛の中に果佛となるべき種子を含めるからのことである、果佛は劫火の如く、因佛は螢火の如きもの、その小火も大火も火の自性に至りては同一である、線香の小火も一都會を燒くの力がある、マッチの小火も大山岳を燒くの力がある、この道理を知らざれば增上慢に落ち易い、釋迦牟尼佛の光明は太陽の如きもの、凡夫一念の信光

第二十章　三寶稱名

◎同、道心ノ卷ニ曰ク

ツキニハフカク佛法僧ノ三寶ヲウヤマヒタテマツルヘシ、生ヲカヘ身ヲカヘテモ三寶ヲ供養シウヤマヒタテマツランコトヲネカフヘシ、ネテモサメテモサメテモ三寶ノ功德ヲオモヒタテマツルヘシ、ネテモサメテモ三寶ヲトナヘタテマツルヘシ、タトヒコノ生ヲステテ、イマタノチノ生ニウマレサランソノアヒタ中有トイフコトアリ、ソノイノチ七日ナルソノアヒタモ、ツネニコヱモヤマス三寶ヲトナヘタテマツラントオモフヘシ、七日ヲヘヌレハ中有ニテ死シテマタ中有ノ身ヲウケテ七日アリ、イカニヒサシトイヘトモ七日ヲハスキス、コノトキナニコトヲミ、ナニコトヲキクモ、サハリナキコト天眼ノコトシ、カカラントキ、心ヲハケマシテ三寶ヲトナヘタテマツリ、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧ト、トナヘタテマツランコトヲスレス、ヒマナクトナヘタテマツルヘシ、ステニ中有ヲスキテ父母ノホトリニチカツカントキモ、アヒカマヘテ正智アリテ託胎セン、處胎藏ニアリテモ三寶ヲトナヘタテマツルヘシ、ウマレオチントキモ、トナヘタテマツランコト、オコタラサラン、六根ニヘテ三寶ヲ供養シタテマツリ、トナヘタテマツリ、歸依シタテマツラントフカクネカフヘシ、マタコノ生ノオハルトキハ、フタツノマナコタチマチニクラクナルヘシ、コノトキ十方ノ諸佛アハレミヲタレサセタマフ緣アリテ、惡趣ニオモムクヘキツミモ轉シテ天上ニウマレ、佛前ニウマレテ佛ヲナカミタテマツリ、佛ノトカセタマフノリヲキクナリ、眼ノマヘニヤミノキタランヨリノチハ、タユマスハケミテ三歸依ヲトナヘタテマツルコト、中有マテモ後生マテモオコタルヘカ

ラス、カクノユトクシテ、生生世世ヲツクシテトナヘタテマツルヘシ、佛果菩提ニイタランマテモオユタラサルヘシ、ユレ諸佛菩薩ノオユナハセタマフミナナリ、ユレヲフカク法ヲサトルトモイフ、佛道ノ身ニソナハルトモイフナリ、サラニユトオモヒヲマシヘサラントネカフヘシ、マタ一生ノウチニ佛ヲツク、リタテマツラントイトナムヘシ云々。

○評註』以上の數卷に亙り永祖の釋尊に對する恭敬尊重の意のみにて稱名のことは甚だ稀であつた、供養諸佛の卷に一稱南無佛のことありしも今の如くに示したまはぬ、今のお示しは中有までも後生までもと極端に三寶の稱名を示したまふた、歸依三寶の卷に「イマノ衆生イタヅラニ各々ノ一佛ノ名號ヲ稱念センヨリハスミヤカニ三歸ヲウケタテマツルベシ」と示したまひ、又辨道話の卷に

又讀經念佛等ノツトメニウルトコロノ功德ヲナンヂシルヤイナヤ、タダシタヲウゴカシ、コエヲアグルヲ佛事功德トオモヘルイトハカナシ、佛法ニ擬スルニウタタトホク、イヨイヨハルカナリ(中略)口聲ヲヒマナクセル春ノ田ノカヘルノ晝夜ニナクガコトシ、ツヒニ又益ナシ」と此等の所謂念佛と云ひ、一佛の名號とのたまひしは、永祖の御時代に彌陀稱名、彌陀念佛の盛りなりしを誡めたまふたものと思はるゝ、故に永祖の御趣意は飽くまでも三寶稱名の外はなかつたやうである、傘松道詠の中に「草の庵に寢ても寤めても申すこと南無釋迦牟尼佛あはれみたまへ」とあれど、この一首を以て釋尊一佛の稱名を唱道したまひしものとは考へられぬ、されど三歸の南無歸依佛が釋迦牟尼世尊に當ることは否むべからざることなれど、唯それのみ稱へよと敎へたまふたものとは思はれぬのである。

されど永祖が釋尊一佛に重きを置かれたことは面授の卷にても明かな事である、又法華經を尊重したまひしことは歸依三寶の中にも明示せられ、又此の道心の卷にも一生のうちに法華經を造り奉れよと懇示せられた、その經卷のなかに、一稱南無佛、皆已成佛道とあり、神力品中に他方の衆生が娑婆世界に向つて南無釋迦牟尼佛を連聲に稱へたといふことをも深く承認したまふのであるから、永祖の兒孫たる者が、時代の要求によりて釋尊一佛の名號を稱念したてまつるが如きは決して祖意に反せぬものと信ずる、然れども三歸稱名を廢するといふの

ではない、出家在家の心念口稱として且らく一佛稱名の成佛義を主張せんと欲するのである。

第二十一章　佛智廣大

◎同、四禪比丘ノ卷ニ曰ク

舍利弗ハヒサシクユレ四果ノ聖者ナリ、三千大千世界所有ノ智慧ヲアツメテ、如來ヲノソキタテマツリテ、ホカヲ一分トシ、舍利弗ノ智慧ヲ十六分ニセル一分ト、三千大千世界所有ノ智慧トヲ格量スルニ、舍利弗ノ十六分ノ一分ニオヨハサルナリ、シカアレトモ如來未曾說ノ法ヲトキマシマスヲキキテ、前後ノ佛說ユトニシテワレヲ欺誑シマシマストオモハス、波旬無此事トホメタテマツル、如來ハ福增ヲワタシ、舍利弗ハ福增ヲワタサス、四果ト佛果トハカルユトカクノユトシ、タトヒ舍利弗オヨヒモロモロノ弟子ノユトクナラン、十方界ニミナミテラン、トモニ佛智ヲ測

量センユトウヘカラス、孔老ニカクノユトクノ功德イマタナシ、佛法ヲ習學センモノ、タレカ孔老ヲ測度セサラン、孔老ヲ習學スルモノ佛法ヲ測量スルユトイマタナシ、イマ大宋國ノトモカラ、オホク孔老ト佛道ト一致ノ道理ヲ立ツ、僻見モトモフカキモノナリ。

○『評註』舍利弗いかに智慧第一なるも佛智には遙か及ばず、孔老聖人と云ふと雖も佛大聖人には遙かに及ばず、三教一致の說を唱ふるは僻見なりと呵したまふ佛子たる者は常にこの識見がなくてはならぬ。

◎清淨法行經曰、月光菩薩彼稱顏回、光淨菩薩彼稱仲尼、迦葉菩薩彼稱老子云々、ムカシヨリコノ經ヲ擧シテ孔子老子等モ菩薩ナレハ、ソノ說ヒソカニ佛說ニオナシカルヘシ、イトトマタ佛ノツカヒナラン、ソノ說オノツカラ佛說ナラントイフ、コノ說ミナ非ナリ、古德曰準諸目錄皆推此經以爲疑僞云々、イマコノ說ニヨラ

ハイヨイヨ佛法ト孔老トコトナルヘシ、ステニコレ菩薩ナリ、佛果ニヒトシカルヘカラス、マタ和光應迹ノ功德ハヒトリ三世諸佛菩薩ノ法ナリ、俗人凡夫ノ所能ニアラス、實業ノ凡夫イカテカ應迹ニ自在ナラン、孔子イマタ應迹ノ說ナシ、イハンヤ孔老ハ先因ヲシラス、當果ヲトカス、ワツカニ一世ノ忠孝ヲモテ、キミニツカヘ家ヲヲサムル術ヲムネトスルナリ、サラニ後世ノ說ナシ、ステニコレ斷見ノ流類ナルヘシ、莊老ヲキラフニ小乘ナホシラス、イハンヤ大乘ヲヤ、トイフハ上古ノ明師ナリ、三敎一致トイフハ智圓正受ナリ、後代澆季愚闇ノ凡夫ナリ、ナンヲナンノ勝出アレハ、カノ上古ノ先德ノ所說ヲサミシテミタリニ佛法ト孔老トヒトシカルヘシトイフ、ナンヲカ所見スヘテ佛法ノ通塞ヲ論スルニタヘス、負笈シテ明師ニ參學スヘシ、智圓正受ナンヲラ大小兩乘スヘテイマダシラサルナリ。

○『評註』清淨法行經なるものゝ僞經たることは明白なるもの、孔老莊子を目して俗塵凡夫、實業凡夫、斷見の流類となしたまひし永祖の見識は見上げたものなれど、此れは僞はらぬ實語である。

◎古德曰、如孔丘姬旦之語、三皇五帝之書、孝以治家、忠以治國、輔以利民、只是一世之內、不涉過未、未齊佛法之益、三世豈不謬乎、マコトナルカナ古德ノ語、ヨク佛法ノ至理ニ達セリ、世俗ノ道理ニアキラカナリ、三皇五帝ノ語、イマタ轉輪聖王ノヲシヘニオヨフヘカラス、梵王帝釋ノ說ニナラヘ論スヘカラス、統領スルトコロ、所得ノ果報ハルカニ劣ナルヘシ、輪王梵王帝釋ナホ出家受具ノ比丘ニオヨハス、イカニイハンヤ如來ニヒトシカランヤ、孔丘姬旦ノ書マタ天竺ノ十八大經ニオヨフヘカラス、四韋陀ノ典籍ニナラヘカタシ、西天婆羅門敎イマタ佛敎ニヒトシカラサルナリ、ナホ小乘聲聞ニヒトシカラス、アハレムヘシ、震旦小國邊方ニシテ三

教一致ノ邪說アルコトヲ。

○『評註』支那印度の諸敎諸學も大聖釋尊の所說に及ぶべからずと讚歎したまふ。

◎第十四祖龍樹菩薩曰、大阿羅漢辟支佛、知八萬大劫、諸大菩薩及知無量劫、孔老等イマタ一世ノウチノ前後ヲシラス、一生二生ノ宿通アランヤ、イカニイハンヤ一劫ヲシランヤ、イカニイハンヤ百劫千劫ヲシランヤ、イカニイハンヤ八萬大劫ヲシランヤ、イカニイハンヤ無量劫ヲシランヤ、コノ無量劫ヲアキラカニテラシシレルコト、タナコロヲミルヨリモアキラカナル諸佛菩薩ヲ孔老等ニ比類セン、愚闇トイフニモタラサルナリ、ミミヲオホフテ三敎一致ノ言ヲキクコトナカレ邪說中最邪說ナリ。

○『評註』この三敎一致といふは宋の嘉泰中に僧の正受といへるもの普燈錄三十卷を選進して曰く、臣孤山智圓の言を聞くに曰く、吾道は鼎の如し、三敎は足の如し、足一つ虧ければ鼎覆へると、臣嘗て其人を慕うて其說を稽ふ、乃ち知る儒の

敎たる其要誠意に在り、道の敎たる其要虛心に在り、釋の敎たる其要見性に在り誠意や虛心や見性や、名を異にして體を同ふす、厥の歸する所を究むるに適として此道と會はざるは無し」と云つたことがある、それが永祖の癖に障つてかくはビシ〳〵と彈呵せらるゝのである。

○莊子曰、貴賤苦樂、是非得失、皆是自然ユノ見ステニ西國ノ自然見ノ外道ノ流類ナリ、貴賤苦樂、是非得失ミナユレ善惡業ノ感スルトコロナリ、滿業引業ヲシラス、過去來世ヲアキラメサルカユヱニ現在ニクラシ、イカテカ佛法ニヒトシカラン、アルカイハク諸佛如來ヒロク法界ヲ證スルユヱニ、微塵法界ミナ諸佛ノ所證ナリ、シカアレハ依正二報トモニ如來ノ所說トナリタルカユヱニ山河大地日月星辰四倒三毒ミナ如來ノ所說ナリ、山河ヲミルハ如來ヲミルナリ、三毒四倒佛法ニアラストイフコトナシ、微塵ヲミルハ法界ヲミルニヒトシ、造次顚沛ミナ三菩提ナリ、コレヲ

大解脱トイフ、ユレヲ單傳直指ノ祖道トナツク」カクノコトクイフトモカラ稻麻竹葦ノユトク朝野ニ徧滿セリ、シカアレトモコノトモカラダレ人ノ兒孫トイフコトアキラカナラス、スヘテ佛祖ノ道ヲシラサルナリ、タトヒ諸佛ノ所說トナルトモ山河大地タヲマヲニ凡夫ノ所見ナカルヘキニアラス諸佛ノ所說トナル道理ヲナラハスキカサルナリ、ナンヂ微塵ヲミルヵ法界ヲミルニヒトシトイフ、タミノ王ニヒトシトイハンカコトシ、マタナンソ法界ヲミテ微塵ニヒトシトイハサル、コノトモカラノ所見ヲ佛祖ノ大道トセハ諸佛出世スヘカラス、祖師出現スヘカラス、衆生得道スヘカラサルナリ、タトヒ生卽無生ト體達ストモコノ道理ニアラス。

○『評註』古も今も自然外道の跋扈するは悲むべきである、禪者の中に莊子を學んで佛法に同ずる者も少なからぬ、山河を見るは如來を見るなりとは、彼の蘇東坡が「谿聲便是廣長舌、山色豈不清淨身、夜來八萬四千偈、他日如何擧似人」と述した、東坡その人は果して大悟したるや否やは疑問である、彼れ聊か禪者の涕唾をなめて此偈を作つたのかも知れぬ、よし大悟したにもせよ、未悟の禪者がこの句調を以て諸法皆是佛法と談じては全く自然見の外道に異ならぬ、又曰く、柳染觀音微妙相、松吹說法度生聲」と、これも大悟底の人より詠むれば斯く云はれぬでもなけれど、未悟底の人がこれを弄するときは、これも亦自然外道の魔坑に墮するを免かれぬ、又峯の色谷のひゞきもみながら釋迦牟尼佛の聲とすがたとこれも亦詠めやうに依ては無修無證の自然見に墮するの憂ひがある、諸佛の出世祖師の出現は修證現成の爲めである、然るに坐禪をしたこともなく、印可を受けたこともなき文字禪者、句頭禪の輩が口にまかせ、筆にまかせて、この自然見を鼓吹するは危險極まる魔禪である。

○古德曰、今時多有還俗者、畏憚王役入外道中、偸佛法義竊解莊老、遂成混雜、迷惑初心、孰正孰邪、是爲發得韋陀法之見、シルヘシ佛法ト莊老トイツレカ正イツレカ邪ヲシラス、混雜スルハ初心ノト

モカラヲ迷惑スルイマノ智圓正受等ユレナリ、タダ愚昧ノハナハタシキノミニアラス稽古ナキノイタリ顯然ナリ炳焉ナリ、近日宋朝ノ僧徒ヒトリトシテ孔老ハ佛法ニオヨハストシレルトモカラナシ、ナホ佛祖ノ兒孫ニナレルトモカラ稻麻竹葦ノコトク九州ノ山野ニミテリトイフトモ、孔老ノホカニ佛法スクレタリト曉了セル一人半人アラス、ヒトリ先師古佛ノミ佛法ト孔老トヒトツニアラスト曉了セリ、晝夜ニ施設セリ、經論師マタ講者ノ名アレトモ、佛法ハルカニ孔老ノ邊ヲ勝出セリト曉了セルナシ、近來一百年來ノ講者オホク參禪學道ノトモカラノ儀ヲマナビ、ソノ解會ヲヌスマントス、モツトモアヤマレリトイフヘシ、孔子ノ書ニ生知者アリ、佛教ニハ生知者ナシ、佛法ニハ舍利ノ說アリ、孔老舍利ノ有無ヲシラス、一ニシテ混雜セントオモフトモ廣說ノ通塞ツヒニ不得ナラン。

○論語云、生而知之上、學而知者次、困而學之又其次也、困而不學民斯爲下矣、モシ生知アラハ無因ノトカアリ、佛法ニハ無因ノ說ナシ、四禪比丘ハ臨命終ノトキタチマチニ謗佛ノツミニ墮ス。

△註、四禪比丘の謗佛とは、佛弟子の中に一比丘があり第四禪を得た時增上慢を生じて四果を得たりと謂ふた、初め初禪を得しとき須陀洹果を得たと謂ひ、第二禪を得たとき斯陀含果を得たりと謂ひ、第三禪を得たとき阿那含果を得たりと謂ひ、第四禪を得た時に阿羅漢果を得たりと思うて自から高ぶり更に精進修錬を求めなかつた、而して彼れが命終せんとする時に四禪の中陰の相あるを見て邪見を起し、これでは佛の說かせたまひし涅槃といふものは無い、佛は我を欺かれたと謂ふた、此の惡邪見の爲の故に四禪天に生るべき中陰の相が滅失して無間地獄に墮すべき中陰が現はれ命終して無間地獄の中に生れた、これを謗佛の罪といふ、時に釋尊が偈を說いて諸比丘に示された曰く多聞持戒禪、未得漏盡法、雖有此功德、此事難可信」と實に謗佛の罪は恐ろしきものである、多聞持戒の禪も未だ漏盡解脫の法を得なければ墮獄を免かれぬとして見ると、今時專ら破戒して戒禪を口にする者は皆墮獄の罪を免かれぬのであらう、早く佛陀に歸依し奉りて衆苦を解脫するのが急務中の急務である。

佛法ヲモテ孔老ノ教ニヒトシトオモハン、一生ノウチヨリ謗佛ノツミフカカルベシ、學者ハヤク佛法ト孔老ト一致ナリト邪計

スル解ヲナケスツヘシ、コノ見タクハヘテステスハツヒニ悪趣ニ墮スヘシ、學者アキラカニミルヘシ、孔老ハ三世ノ法ヲシラス、因果ノ道理ヲシラス、一洲ノ安立ヲシラズイハンヤ四洲ノ安立ヲシランヤ、六天ノコトナホシラス、イハンヤ三界九地ノ法ヲシランヤ、小千界ヲシラス中千界ヲシルヘカラス、三千大千世界ニ王タル如來ニ比スヘカラス、如來ハ梵天帝釋轉輪聖王等晝夜ニ恭敬侍衛シ、恒時ニ說法ヲ請シタテマツル孔老ニカクノコトクノ德ナシ、タダコレ流轉ノ凡夫ナリ、イマタ出離解脫ノ道ヲシラス、イカテカ如來ノコトク諸法實相ヲ究盡スルコトアラン、モシイマタ究盡セスハナニヨリテカ世尊ニヒトシトセン、孔老内德ナク外用ナシ世尊ニオヨフヘカラス、三教一致ノ邪說ヲハカンヤ、孔老、世界ノ有邊際無邊際ヲ通達スヘカラス、廣ヲミスシラス・大ヲシラスミサルノミニアラス、極微色ヲミス刹那量ヲシル

ヘカラズ。

世尊アキラカニ極微色ヲミ刹那量ヲシラセタマフ、イカニシテカ孔老ニヒトシメタテマツラン、孔老莊子惠子等ハタダコレ凡夫ナリ、ナホ小乘ノ須陀洹ニオヨフヘカラス、イカニイハンヤ、第二第三第四ノ阿羅漢ニオヨハンヤ、シカアルヲ學者クラキニヨリテ諸佛ニヒトシムル迷中又深迷ナリ、孔老ハ三世ヲシラス、多劫ヲシラサルノミニアラス、一念ヲシルヘカラス、一心ヲシルヘカラス、ナホ日月天ニ比スヘカラス、四天王衆天ニオヨフヘカラス、世尊ニ比セハ世間出世間ニ迷惑スルナリ。

○評註『孔老と釋尊とを比較するは螢火を以て太陽に比し、微塵を拈じて大千に等しからしめんとするの愚論なれども其の懸隔は永祖非凡の眼睛に依りて吾等これを知り得るのである、永祖にあらざれば斯くの如きの批判は不可能である。

○東土愚暗ノ衆生ミタリニ佛敎ニ違背シテ佛道トヒトシキ道アリトイフコトナカレ、スナハチ謗佛謗法トナルヘキナリ、西天ノ鹿頭並ニ論力、乃至長爪梵志、先尼梵志等ハ、博學ノ人タリ、東土ニムカシヨリイマタナシ、孔老サラニオヨフヘカラサルナリ、コレラミナ、ミツカラカ道ヲステテ佛道ニ歸依ス、イマ孔老ノ俗人ヲモテ佛法ニ比類センハ、キカンモノモツミアルヘシ、イハンヤ阿羅漢辟支佛モミナツヒニ菩薩トナル、一人トシテモ小乘ニシテヲハルモノナシ、イカテカイマタ佛道ニ入ラサル孔老ヲ諸佛ニヒトシトイハンヤ、大邪見ナルヘシ、オホヨソ如來世尊ハルカニ一切ヲ超越シマシマスコト、スナハチ諸佛如來諸大菩薩、梵天帝釋ミナトモニホメタテマツリ、シリタテマツレルトコロナリ、西天二十八祖トモニシレルトコロナリ、オホヨソ參學ノヲカラアルモノミナトモニシレリ、イマ澆運ノ衆生、宋朝愚暗ノトモカ

ラ三敎一致ノ狂言モナキヲルベカラス、不學ノイタリナリ。

○評註『永祖が三敎一致の愚論を排斥したまふの言甚だ激烈を極めたまふ、吾等兒孫其の卓見に驚かざるを得ない、孔老も世間にては之れを聖人と崇む、然るを流轉の凡夫なり、斷見の流類なりとの批判は猛烈なりといへども公平に觀察すれば至當の言にして誹謗ではない、舍利弗、目犍連、鹿頭論力、長爪先尼の如き印度第一流の大智者も、釋尊の大智に比すれば日下の孤燈にして如何ともすることができぬ、祖師學道用心集に示して曰く「佛法ハ諸道ニ勝レタリ所以ニ人之ヲ求ム」と又曰く「勝ヲ愛スル所以ノ者ハ勝ヲ愛スベキナリ」と、西天東土及び日本に於いて拔群なる人は佛道の諸道に勝れたるを愛じて悉く此門に歸入したのである、今の世人は未だ諸道の何物たるを知らず究めず、佛法の勝れたるを見ず聞かずして傲慢不遜にも佛敎學ぶに足らず佛陀信ずるに足らずといふ、これを增上慢人といふ、震旦國の二祖慧可大師神光法師は博達の士であるが自から歎嗟して曰く「孔老ノ敎ハ禮術風規ナルノミ、莊易ノ書ハ未ダ妙理ヲ盡サズ、近ロ聞ク達磨大士少林ニ住止ス、至人遙カナルニアラズ、當ニ玄境ニ造ルベシ」とて遂に少林に到り、從前の所學を拋下して達磨大師に隨つて諸佛無上の妙道を求められ

た、誠に夫れ勝を愛すべき所以のものは勝を愛して其の我見法見を捨つるのである、今人も亦斯くあらねばならぬ。

第二十二章　釋尊の大慈悲

◎永平大清規典座教訓ノ一節ニ曰ク

大師釋尊猶分二十年之佛壽而蔭末世之吾等其意如何、唯垂父母心而已、如來全不可求果、亦不可求富。

○評註』釋尊の佛壽は百歳なるも、八十歳(又は七十九歳)にして入滅したまひしは其の眞意は、二十年を末世の兒孫に分ちたまふたといふのである。

◎又曰、世尊二十年遺恩蓋覆兒孫、白毫光一分功德受用不盡。

◎又曰、不見麼漿水一鉢也供十號兮自得老婆生前之妙功德菴羅半果也捨一寺兮能萠育王最後之大善根、授記萠感大果、雖佛之緣多虛不如小實、是人之行也。

▲註、大智度論卷八に曰く、昔し佛在世の時、佛、阿難と舍婆提城より婆羅門城に向ひ玉ひし時、婆羅門城の王外道に屬す、佛の來らんと欲するを聞き、卽ち制限を立つ、若し佛に食を與へ佛と共に語る者は應に金錢五百文を罰すべしと、後に佛來り到りて城に入り食を乞ひ玉ふに、人皆門を閉づ、佛と阿難と空鉢にして出て玉ふ、一老婢を見るに破れたる瓦器を持し、臭潘淀を盛りて門を出づ之を棄つ、佛の相好を見るに空鉢にして來り玉ひぬ、心に念じて施さんと欲す、佛其意を知しめし鉢を申べ玉ふ、從て棄つる所の潘淀を乞ふ、婢卽ち淨心に持し來て佛に施す、佛施を受け已り阿難に語て言く、此婢は十五劫の中天上人間に福を受て快樂し、惡道に墮せず、後に男身を得出家學道して辟支佛と成る云々。

▲十號とは、一に如來、二に應供、三に正徧知、四に明行足、五に善逝、六に世間解無上士、七に調御丈夫、八に天人師、九に佛、十に世尊。

○此の十號の義、若し總略して之を釋するときは則ち虛妄無きを如來と名く、良福田を應供と名く、法界を知るを正徧知と名く、三明を具するを明行足と名く、還來せざるを善逝と名く、衆生國土を知るを世間解と名く、等與無きを無上士と名く、他心を得るを調御丈夫と名く、衆生の眼となるを天人師と名く、三聚を知るを佛と名く、此の十德を具し玉ふを世間尊と名く、祖師述る所の經敎皆此義に依て釋す、今の此經の中には世間解と無上士とを合して以て一號と爲す、開合と不動なりと雖も其義は則ち一なり、故に兩つながら之を存す、此外更に細釋あれども今は略す。

▲菴羅の半果、阿育王經卷五に曰く、大臣太子に語て言く、阿育王須臾に應に終るべし、而も分つて四十千萬金を遣し鷄寺に送與せんと欲す、一切の國土は物を以て力と爲す、太子應に守門の人を勑して金を出さしむること勿るべしと、是に於て太子便ち之を勑す、阿育王勑して復た施行せず、唯だ金器あり王の食用に供す、王食し訖て便ち此の金器を送り彼の鷄寺に與へ令む、乃至時に阿育王復た物有る無し、唯だ半菴羅果其手中に在り、時に阿育王

心大に悲惱し、諸大臣を召して及び人民一切和合して而も之に語て言く誰か今日に於て此地の主たるぞ、大臣起て作禮合掌し說て言く、唯だ天を主と爲す、更に異人無し、時に阿育王淚落ること雨の如し、乃至阿育王卽ち傍臣を呼ぶ、名けて跋羅目硎と曰ふ、而も之に語て曰く、我れ自在を失ふ、汝今我に於て最後の使と爲れ、唯此の一事汝應に作すべし此半菴摩勒果、鷄寺に送與して我語を宣て曰く、阿育王衆僧の足を禮す、昔は一切閻浮提の地を領す、今は唯だ菴摩羅果のみあり、是れ我が最後所行の布施なり、願くは僧之を受けよ、此物小なりと雖も以て衆僧に施す、福德廣大ならん、乃至諸の衆僧阿育王の半阿摩勒果を得、碎て以て末と爲し、甕中に置き徧く衆僧に行す、乃至、時に阿育王人に扶起せられ四方を觀、衆僧の處に向ひ合掌して言く、今珍寶を留む、此外大地乃至大海、一切僧に施すと云々△菴摩羅は梵音、華には清淨と言ふ、果中の極品種、西域に出づ、又奈の類なり、其味初食は苦澁、良久して更に甘し、故に餘甘と曰ふ。

第二十三章　釋尊一佛

◎永平大清規知事清規監院之章ニ曰ク

可レ見ニ十方諸佛一可レ見ニ釋迦一佛一也、不レ如レ是衆、百萬衆實非ニ叢林一也、非ニ佛道衆一也。

○評註『永祖の御信仰が釋尊一佛に在しますことは正法眼藏中の諸說により て明かなることを證するに餘りありたれども、此の御文の如きは最も有力なる御示誨なりと拜見せらるゝのである、蓋し此れは叢林の法則として示したまふたので在家の爲めに垂示せられしものとは思はれぬ、されど天下の叢林は自未得度先度他の任に堪ふる菩薩子を陶冶する道場なるに依り、衆僧の信仰が釋尊一佛にあらざれば全く佛道の衆と云はれぬのである己に此の叢林は永平寺を以て根本道場とし、それより枝條華葉相榮えて天下の叢林となり、一萬四千の寺院道場となりたるものなるがゆゑ、之れに住する僧徒は言ふも更なり、之れに從屬する檀信徒は必ず釋尊一佛を安置したてまつり、見たてまつり、禮したてまつり、信じたてまつり、稱名し、供養したてまつらなくてはならぬ、然るを爲さずして他佛を見たてまつり、餘菩薩を拜したてまつるは高祖の御眞意に違背するものと云はねばならぬ、然るに永祖門下に流れを汲むの僧俗、何故に三世諸佛を禮拜し、十方諸佛を崇拜するのであらうか、斯くては縱ひ百千萬衆なりと雖も眞個佛道の四衆とは申されぬのである、故に此理を信解するものは、縱ひ如何なる迫害壓抑があらうとも早く此の一佛に歸依したてまつりて自己の安身立脚の地を定め、自信敎人信の天職を全ふしなければならぬ。

○監院如レ見ニ道心之士稽古之人、深生ニ敬重顧愛之念一若見雖レ遇ニ經卷

知識、不信不孝於三寶之輩及無道念不稽古之輩者、須知魔黨也闡提也、知而不可容衆。

○評註』道心の士といふも稽古の人といふもみな釋尊信仰の人に限るのである、その經卷を繙き知識に參見する者たりとも、不信不孝の輩は佛祖の兒孫と云はれぬ、斯かる者は清淨大海衆の中に容れてはならぬとの禁戒である。

○佛言、不信之人猶如破瓶、然則不信佛法之衆生更不可爲佛法之器也（增一阿含經）佛言、佛法大海信爲能入、（華嚴經）明知不信之衆生未可共住者歟、黃龍南禪師云、像季之末人多憍蕩、愛多虛僧少實、測知愛多虛乃僞之漸也。

○評註』信とは何ぞ釋迦牟尼佛を信じ、佛の說かせたまひし法を信じ、佛の法に依て得道せし聖僧を信じ、また凡僧をも信ずるのである、多虛とは何ぞ化佛化菩である、少實とは何ぞ釋迦牟尼佛である、多虛を愛するによりて僞佛敎となり僞信仰となる、一佛を愛するときは眞實の他力に入るのである、曲解なりとするなかれ、余は斯くの如くに信ずるのである。

○僧伽難提尊者（西天十七祖）知衆生慢乃曰、自雙林示滅八百餘年、人無至信正念輕微、不敬眞如唯愛神力、悲哉八百餘年、二千載內猶無至信正念微、況乎今日弊不可比當時也、四倒何爲、三毒難脫。

○評註』眞如は三寶の妙體にして三寶は眞如の妙用である、故に眞如を敬ふものは必ず三寶を敬ひ、三寶を信ずるものは必ず眞如を信ずるのであるが、末法澆季の人は憍慢放蕩の心多きが故に正念に乏しい、正念が輕微であるから不思議なことを愛するやうになる、高祖當時の弊すら斯くの如し、高祖今日の擾々たる俗習を見たまふたならば云何に慨嘆したまふであらうか、四倒は淨樂我常、三毒は貪瞋痴である、在家も出家も皆此中に出頭沒頭してゐるのである、かゝる中にも釋尊一佛の信仰而も、その稱名は碧玉を濁水の中に投ずるが如く、伊蘭の臭林に栴檀の香木生ずるが如き大功德を見る。

○監院若遇人天或欲供衆、或欲起造、先應子細檢點干檀那之正信不信清淨不淨、稟往持人而俱商量、若決定淨信之與正見、卽聽許之、未然莫許、所謂正信者如須達長者之信心、祇陀太子之仁義者是也

須達之爲須達也、未爲大富祇陀之爲祇陀也實是清貧也、依正信而被如來聽許也。

○評註『須達の信心とは唯一人の釋迦牟尼佛を信じたのである、彼れは未だ三世諸佛や十方如來の多虛を信じたものではない、唯釋尊の御人格を信じて祇園精舍を建立するまでに至つたのである、故に今日の信者檀越たる者も須達夫婦の如く如來を信じて布施すべきである。

○或生前雖未信三寶、臨命終時修小功德早須聽許。

○評註『何をか小功德としたものであらうぞ、龍樹祖師の曰く「如求佛果讚歎一偈稱一南謨燒一捻香奉獻一華如是小行必得作佛」と高祖大師評して云く、コレヒトリ龍樹祖師菩薩ノ所說トイフトモ歸命シタテマツルベシ、イカニイハンヤ大師釋迦牟尼佛說ヲ龍樹祖師正傳擧揚シマシマストコロナリ、ソレライマ佛道ノ寶山ニノボリ、佛道ノ寶海ニイリテ、サイハヒニタカラヲトレル、モトモヨロコブベシ、曠劫ノ供佛ノチカラナルベシ、必得作佛ウタガフベカラズ、決定セルモノナリ、釋迦牟尼佛ノ所說カクノゴトシ」復次有小因大果小緣大報、如求佛道讚一偈一稱南無佛燒一捻香必得作佛、何況聞諸法實相不生不滅、不不生不不滅而行因緣業亦不失世尊ノ所說カクノゴトクアキラカナルヲ、龍樹祖師シタシク正傳シマシマスナリ云々」と是くの如きは小功德である、余は此中に於いて一稱南無佛の小功德を取るものである、この一稱南無佛は一稱南無釋迦牟尼佛である、たとひ平素深く三寶を信ぜずとも永祖門下の衆生、僅かにこの稱名を修せば必得作佛疑ひなしである。

○恭敬於檀那施主慈心於檀越施主既是如來世尊之敎敕也、雖小因感大果唯三寶之福田而已、龍樹祖師云、小善能作大果者、如求佛果讚歎一偈稱一南謨燒一捻香奉獻一華如是小行必得作佛。

○評註『此の開示に依て見るも、高祖大師がその檀越信徒に對して一稱南無佛の功德を勸めたまひし御本懷なることは明々了々である、殊に辱さは「小因と雖も大果を感ずるは唯だ三寶の福田のみなり」との御一語である、小因は一偈一稱名である、大果は佛果菩提である、この小因に依つて大果を感ずるものなりとせば何を苦んで坐禪持戒の難行を拈じて在家檀越に臨むべきぞ、然るに此の妙行

を施さずして彼等の勤まるべからざる難行を施してこれを苦しめるは檀那施主を恭敬すといふべきであらうか、それでも彼等に慈心ありといふべきであらうか、余が一佛主義を唱道するは彼を恭敬し、彼に慈心の切なるものである。

所謂一偈とは釋迦牟尼佛讃歎の偈文である曰く、四八端嚴微妙相、僧祇三大劫修來面如滿月目如蓮、天上人間咸敬仰の如き又は天上天下無如佛、十方世界亦無比、世間所有我盡知、一切無有如佛者の如き又は佛面猶如淨滿月、亦如千日放光明圓光普照於十方、喜捨慈悲皆具足の如き又は三僧祇劫度衆生、勤修八萬波羅蜜、因圓果滿成正覺、住壽凝然無去來等の如きもの何れでもよい。

第二十四章　稱名の本據

◎永平廣錄卷二　浴佛上堂曰

我佛如來今日生、十方七步一時行、誰知步步生諸佛、諸佛單傳今日聲過去未來并現在同生同處亦同名南無釋迦牟尼佛香水洗頭浴老兄、這箇是浴底、降生道理作麽生是浴儀、長時我佛浴衆僧、今日衆僧澆我佛、良久曰、大衆同到佛殿灌浴我佛、下座。

○評註『正法眼藏九十五卷ありといへども、南無釋迦牟尼佛」といへる七字の名號を尋ぬることが出來ぬ、況や其他に於いてをや、高祖大師の遺文中只一ヶ所此に於いて珍らしくも具體的の七字の名號を拜することが出來たのである、傘松道詠集の中に七字の名號なきにあらざるも彼れ果して正確なるものなりや否やは大いに參究の餘地がある、されど今此處の垂語に至りては脫體露現である。

第二十五章　浴佛上堂

◎同第二卷

今日我本師釋迦牟尼如來降生于毘藍園裡、年年有今日、每今日在毘藍園裡、且道大聖降誕也否、若道降誕許一枚修行、若道不降誕許一枚修行、既能如是不被山礙、不被海礙、誕生王宮、既不被山礙、不被海礙、被生礙也否、先佛先祖縱雖道被生礙、今日山僧祇道不被生礙、既能不被山礙、不被海礙、不被生礙、盡界盡地諸人、與釋迦牟尼如來同生而言、天上天下唯我獨尊、乃是獅子吼、乃是嬰兒啼、恁麽見成作

麽生道、良久云、盡界彌天、嘉運至老婆心切聖降誕、聖降誕、將什麽供養奉覲禮拜、灌浴、將清淨大海衆入佛殿有行儀。

○評註　永祖拈じて老婆心切聖降誕と此れは是れ久遠實成の古佛が老婆心切の大慈悲を以て、五濁の衆生濟度の爲めに降誕したまふたのであるから生に礙へられたまはぬのである、凡夫の生誕と天地懸隔である、生下と同時に唯我獨尊とのたまふ、已に獨尊なるが故天地六合に於いて如來に等匹するものがない、唯我なるが故に天地の主宰である、然るにも拘はらず尙如來の外に如來以上の何物かがありと思ふ、されど模索することを得ず求覓することを得ずして空しく絶望するまでのことである、これを神と云ひ絶對といふ皆是れ戲論妄想である。

第二十六章　四月八日

◎同、卷之三

我本師釋迦牟尼佛大和尙、二千年前今朝現生降誕于淨飯王宮毘藍園裡周行十方七步、一手指天、一手指地、目顧四方云、天上天下唯我獨尊、大家要見世尊降生麽、拈拂子作一圓相曰、世尊降生了也、盡十方界山河國土其中諸人、有情無情三世十方一切諸佛與瞿曇世尊同時降生了也、都無一物爲先爲後、因甚如斯、所以世尊受大佛降生降生、受大佛脚跟而周行七步、受大佛開口而便道天上天下唯我獨尊、畢竟更道、不受諸受是名正受、若也恁麽涓滴不落別處、作麽生是不落別處、底道理、良久曰、若不傳法度衆生、終不名爲報佛恩、作麽生是傳法報恩底道理、下座與大衆同詣佛殿拜浴如來淸淨法身。

○評註　古德曰く、佛恩を報ずるは弘法より先なるは無し」と、今亦若不傳法度衆生の垂語あり、法とは何ぞ釋尊所說の正法である、三乘十二分敎は是れ如來の所說である、されど權あり實あり、顯あり密あり、時代の人心に適するあり、適せざるあり、故に解毒圓頓にし去ることは出來ぬ、苟くも傳法度生せんとするものは能く衆生の機根を觀察しなければならぬ、已に是れ淸淨法身、甚に因て拜浴し上るものぞ、仔細に參究工夫を要す。

第二十七章　臘八上堂

◎同、卷之五

行法二輪親轉處、菩提樹下覺華明、無量無數大千界、依正一時快樂生、我本師釋迦牟尼佛大和尚世尊、今朝在菩提樹下金剛座上坐禪成等正覺、最初説曰、是夜四分三已過、餘後一分明將現、衆類行不皆來動、是時大聖無上尊、衆苦滅已得菩提、卽名世間一切智、世尊恁麼道意作麼生、大衆還要委悉麼、良久曰、雪裡梅花只一枝、妙香撲鼻先春到、當時世尊復言、往時造作功德利、心所念事皆得成、速疾證彼禪定心、又復到於涅槃岸、所有一切諸怨敵、欲界自在魔波旬、不能惱我悉歸依、以有福德智慧力、若能勇猛作精進、求聖智者得不難、既得卽盡諸苦邊、一切衆罪皆銷滅、是則世尊成菩提時、最初爲人天説法也、法子法孫不可不知、既得知了、作麼生道、永平今朝爲雲水道、要聽麼、良久曰、明星正現佛成道、雪裡梅花只一枝、大地有情同草木、未曾有樂、得斯時。

○『評註』世尊の成道によりて全世界の有情は一時に成道底の眼を開發せしめられた、已に大聖無上尊、滅する底の諸苦ありしや否や、若し諸苦ありしと云はゞ大聖にあらず、當に參究の餘地あるべし。

第二十八章　降魔成道

◎同、卷之五

擧寶積讚佛云（維摩經佛國品）始坐佛樹力降魔、得耳露滅覺道成、三轉法輪於大千、其輪本來常清淨、人天得道此爲證、三寶於是現世間、如今永平慶快三寶現世間、法輪直到當山、聊有山偈良久曰、證於耳露則成佛、三轉法輪於大千、一切人天皆得道、三寶於是現世間、三寶於是現世間時又作家生、山家錦上添春花。

第二十九章　涅槃會上堂

◎同、卷之五

又復言其入涅槃、咸皆戀慕淚何乾、縱憑常在靈山語、盍恨沙羅雙樹寒、正當恁麼時更有什麼道、夜半打筋斗、五更不覺闌。

第三十章　白毫相の功德

◎同、卷之七

上堂曰、嵩嶽高祖曰、我滅後八千年、我法如絲髮許、不移如我在世也、我佛如來道(本業經)爲蔭滅後遺法弟子故留在白毫一相功德、又曰、爲利益遺法弟子故留與二十年佛壽蔭覆弟子、今日永平偶有一頌、良久曰、臘月寒梅含月光、雪山雪上更加霜、如來毫相猶今在、利益遠孫豈度量。

第三十一章　眞佛釋尊

◎同、卷之七

上堂記得趙州道、木佛不度火、金佛不度鑪、泥佛不度水、眞佛屋裡坐、大衆委悉麽、如何是木佛、拘留孫佛是也、如何是金佛、拘那含牟尼佛是也、如何是泥佛、迦葉佛是也、如何是眞佛、釋迦牟尼佛是也、爲甚恁麽良久曰、如來妙色身、世間無與等。

○『許註』木金泥は化佛にしてこれを排すれば無佛となれど、釋迦牟尼佛のみは如何にしても排することが出來ぬ。

第三十二章　慈父世尊

◎同、卷之七

二千年前、今日我等本師釋迦牟尼如來、般涅槃于娑婆世界、西天竺菩提樹每遇今日枝低葉萎、憂如來之涅槃也、此涅槃道理莫向初祖破顏之處而相看、莫向二祖禮拜之時而認得、豈向衲僧打圓相以卜度、豈向作家擊禪床以商量、六祖曹谿大鑑禪師示志達禪師云無上大涅槃圓明常寂照、凡夫謂之死外道執爲斷、諸求二乘人自以爲無作、盡屬情所計、六十二見本然則非出入隱沒、非生滅去來、然而機緣感會、現般涅槃而已、今夜涅槃雙樹又言常在靈山、何時得見慈父、孤露空留世間、雖然如是大千沙界雲孫、正當恁麽時作麽生道、良久曰、鶴林月落曉何曉、鳩尸花枯春不春、戀慕何爲顚狂子、欲遮紅淚結良

因。

○『評註』文中慈父と云ひ、紅涙と云ふ祖師の釋尊に孝順なる赤心片々たるを思うて、雲孫の者は祖師の心を以て心としなければならぬ。

第三十三章　大千の法王

◎同、卷之七

浴佛上堂、八相成道者諸佛化儀也、是以摩耶詣到毗尼園、菩薩降生現世間、帝釋承衣擎菩薩、人天始拜獨尊、顏、正堂怎麽時、寶蓮華開以承菩薩足、諸天花雨散菩薩上、卽行四方面、各七步、觀視四方目未曾瞬、口自出言、世間之中我爲最勝、世間之中我爲最尊、我從今日生分已盡、是最後身、我當作佛、地湧二池而供養聖母、空下二水而滌菩薩、瓔珞寶衣充滿、金牀寶傘圓備、蓋是諸天之所供養也、宛是機緣之所純熟也、天女二萬圍遶於摩耶而扶持、諸天五百讚歎於菩薩而祗候、三千大千之草木忽生好花、一切所有之衆生悉被光明、受苦之類皆脫苦、快樂之輩更增樂、吉祥之瑞相誰敢說盡、慶幸之利益今日猶新、爲甚如斯、大衆還要委悉這箇道理麽、良久曰、坐斷衲僧乾屎橛功夫辨道草鞋穿、無明殼豈等肩去、從此刹那王大千。

○『評註』八相成道は諸佛敎化の儀式なるが故に、釋尊も亦久遠成の佛なれども衆生を度せんが爲の故に此の儀式を示したまふたので、假りに等覺の菩薩として彼の兜率天上より此の南閻浮提なる印土の毘藍園に降生を示したまふたのである、故に生分已盡といふも我當作物といふも皆是れ如來の方便なり參見しなければならぬ、而して我爲最勝、我爲最尊といふもの甚だ人間として自負に似たれども、天中の天、人中の人、聖中の聖、神中の神、靈中の靈、佛中の佛なるが故に空前絕後の大人格、宇宙唯一の獨尊とし、大千界の法王として絕對無上の尊敬を表するは祖師の信仰にして亦我等の信仰である。

第三十四章　出世の大醫王

◎同、卷之八

釋迦老子一期出世爲大醫王、憐愍衆生深沈苦海、於是興慈運悲、以

種種方便演出一大藏教、皆是應病與藥令一切有情得到大安樂之地底方子云云。

○『評註』世界に賢聖多しと雖も釋尊の如き大思想家は未だ嘗て其類を見ざる所である、この大藏經は如來の法身舍利である、この大經卷を見るにつけても非凡絶大の人格たることを信ぜざるを得ぬ。

第三十五章　拈華瞬目

◎同、卷之九

世尊在靈山百萬衆前拈華瞬目、迦葉破顏微笑、世尊告衆曰、吾有正法眼藏涅槃妙心付囑摩訶迦葉、流布將來勿令斷絶、仍以金縷僧伽梨衣付迦葉。

春臺夢覺辨花香。　廣示人天獨飲光。　山雨洗飜清削玉。
嶺雲迸散織成章。　金鱗交色皺文浪。　黃鳥飛聲亂斷腸。
百萬任他空擧首。　頭陀直下已知芳。

○『評註』此れは是れ大法付屬の端的、大聖世尊の眼睛は法界を遍照して今に其の赫々たるを見る、永平高祖五十一世の法孫としてこれを我が扶桑國に傳へたまひ、滅後二千八百六十七年の今日に及んで尙ほ法光の無盡藏なるは全く世尊の光明である、高祖一代の放光說法も亦是れ佛光の赤心片々である。

◎眼藏辨道話の卷に云く、國家に眞實の佛法弘通すれば諸佛諸天ひまなく衞護するがゆゑに王化太平なり、聖化太平なれば佛法そのちからをうるものなり

◎眼藏禮拜得髓の卷に云く、大師釋尊これ無上正等覺なり、あきらむべきはことごとくあきらむ、おこなふべきはことごとくこれをおこなふ、解脫すべきはみな解脫せり、いまのたれかほとりにもおよばん

◎眼藏谿聲山色の卷に云く、三毒を三毒としたれどもがらまれなるによりてうらみざるなり

◎眼藏行持の卷に云く、名利は一頭の大賊なり、名利をおもくせば名利をあはれむべし名利をあはれむといふは佛祖となりぬべき身命を名利にまかせてやぶらしめざるなり

◎眼藏諸惡莫作の卷に云く、諸惡莫作とおこなひもてゆく、諸惡すでにつくられずなりゆどころに修行力たちまちに現成す

◎眼藏行佛威儀の卷に云く、大聖は生死を心にまかす、生死を身にまかす、生死を道にまかす、生死を生死にまかす

◎眼藏佛敎の卷に云く、三乘十二分敎は佛祖の眼睛なり

◎眼藏光明の卷に云く、生死去來は光明の去來なり

◎眼藏身心學道の卷に云く、生死去來眞實人體といふは、いはゆる生死は凡夫の流轉なりといへども大聖の所脫なり

◎眼藏隨聞記に云く、曠劫多生のあひだ、いくたびか徒らに生じ徒らに死せしに、まれに人身を受けてたまゝ佛法にあへるとき此身を度せずんば何れの生にか此身を度せん

評註永祖釋尊觀附錄

玄樓禪師 臨在家語

墻外云く、釋迦一佛の本尊義は洞上の正傳にして印支日歷代の列祖これを繼承し來り、永平祖師に至りて特に著しく宣揚したまひたれども、祖師滅後五百年間は殆と忘却したるの觀ありき、而して宇治興聖寺玄樓禪師に及び始めて在家人信行の標準を確定せられたるものは卽ち本書なり、本書は上中下の三卷として風外禪師の發起に依り開版せられたり、章を分つこと五品、曰く輪解品、頓漸品、業報品、修行品、羯磨品、今は且く其の修行、羯磨の二品を抄出して附錄と爲す。

修行品

師曰く（侍者の筆記なるが故に斯く云ふ）在家の諸善者、漸々修學の功力を以て出離解脫の佛門に入らんことを要せば、先づ六寂光門に依て修行すべし、三心と三修と是を六寂光門と云ふ、所謂三心とは一には實知決定心、二には悉皆回向心、三には知恩報答心是れなり、所謂三修とは一には諸惡莫作修二には衆善奉行修、三には自淨其意修是れなり、此三修は一佛二佛の敎に非ず、十方諸佛の敎みな是くの如し、故に涅槃經に曰く、諸惡莫作衆善奉行、自淨其意是諸佛敎と、所謂實知決定心とは凡そ發心に二種あり、妄想疑猜心と、實知決定心となり、精しく其理を辨へず、疑ひ半分にて發心するを妄想疑猜心と云ふ、是の如きの發心は山鹿の市中に出で、人を視て卽ち逃るが如く、緣に逢ふときは必

ず退く、實に生死の厭ふべく、佛果の求むべきことを知り且つ是に由て修行するときは必ず佛地に至るると知る、是を實知と云ふ、然して後に假令失命の緣に逢ふとも此修行に於ては一足も亦退くべからずと云ふ一念に住す、是を實知決定心と云ふ、此心を以て發心する者は卽の是れ佛子なり、佛子にして佛果を得ざる者は未だ是れあらざる也。

所謂悉皆回向心とは、行住坐臥の四威儀の上、身口意の所作悉皆佛果に回向して一切事善に到らんことを要すべし、此心に住して以て修行すれば自然に純善の境界に入るなり。

所謂知恩報答心とは、吾れ幸ひに此度實知決定心を以て發心して始めて佛子となり、終に苦海を出で、大安樂の佛果を得べきことを知れり、最れ偏へに佛法僧の恩なり、恩を知て報せざるは禽獸の心なり、獸禽の心は禽獸となる可くして佛とはなる可らずと知り、分に隨つて報恩謝德の意を起すなり、此の實知決定心、悉皆回向心、知恩報答心の三心を起し、畢つて然して後に三修に依て修行すべし。

所謂諸惡莫作修とは、一切の惡心をやめ一切の惡事を作さず、一切の惡口を慎むなり、それ惡の中に於て最惡とするは五逆と十惡となり、五逆は無間獄に墮するの罪なり、大惡無道之れに過ぎたのはなし、快意殺生、劫盜人物、無慈行慾、故心妄語、酤酒生罪、談他過失、自讃毀他、慳生毀辱、瞋不受謝、毀謗三寶、是を十惡と云ふ。五逆は勿論、其外一切有命のものを殺すに快き心を以て殺すは諸佛の深く戒め玉ふ所なり、是を快意殺生戒と云ふ、悉しくは上の業報品に明すが如し。

劫盜人物戒も亦業報品に於て悉しくのべ盡せり、本妻と妾と賣女とを除いて或は人の妻を偸み、女子の密夫に通ずる等の邪婬は諸佛の深く戒め玉ふ所なり、是を無慈行欲戒と云ふ、無慈行欲と云ふときは、出家在家共にかゝるといへども、邪婬は則ち在家の無慈行欲と知るべし、若し此道を亂るときは一家及び天下までも治まることなし、慎まずんばある可らず、物の爲に利益あるを除いて其外何事によらず、妄語兩舌をなすは諸佛の戒め玉ふ所なり、是を故心妄語戒と云ふ、決してすまじきことなり、是も亦業報品に備さなり。

酒は人の心を狂亂せしむる者なり、心狂亂するが故に種々の罪を起すなり、自ら之を飲むはその罪己れ一人に留まる、之を酤りて人に與ふるときは、其害限りあることなし、是を以て諸佛之を戒め玉ふなり、是を酤酒生罪戒と云ふ。

法中の惡事を法外の人に談つて法中の不利益を增し、人の信心を妨ぐるはあるまじきこと也、譬へば伊蘭と薝蔔との如し、伊蘭は其花盛開する時は四面四十由旬の間臭氣しかばねの如く、薝蔔の花は落ちて泥土に混ずれども、香氣なほ百花に勝れり、破戒の出家は泥土に混ずる薝蔔の如く、無戒の在家は盛開せる伊蘭の如し、其德破戒の出家に及ばざること遠し遠し、此を以てこれを謗るは是れ罪業なり、諸佛の最も戒め給ふ所なり、是を談他過失戒と云ふ、自身のことをほめ、他人のことを譏るはよからざることなり、然れども他の邪見を破して我が正法に隨はしめんが爲に自讃毀他するは是其人

の利益のとなれば、罪には非ず、但己れが非を飾り他人のことをば好きを取り上げず惡しきを見ては喜んで觸れ廻り、或は讒言を構へて人を不意の難處に陷らしむるは諸佛の戒め玉ふ所なり、是を自讚毀他戒と云ふ、其性慳貪にして丐兒門に到れども少しの物をも施し與へざるのみならず、偸狗を驅るが如く叱し辱かしむる者あり、因果の道理に暗きが致す所なり、一切衆生の生死に流轉し、六趣に沈淪するの根源は唯この貪欲より起るなり、初めに先づ我見を起し、堅く是の我を執し、次に我所を執す此執著を貪欲と云ふ、我れに屬する金銀屋宅米穀衣服妻子眷屬の類、何に限らず是を我所と云ふ、是を我物なりと執著するを根源として無量無邊の執著を起すこと枝蔓の上に枝蔓を生ずるが如し、是を以て生死の苦海を出離せんと欲する者は先づ慳貪の心を除くべし故に六波羅密の最初にまづ布施を修せしむ、況や輪囘の上に於いても慳貪は餓鬼道の因なるをや、此理を知らずして偏に慳貪を事とする者は、命終を期として卽ち餓鬼となる也、是故に如來專ら布施を勸めたまふ。

夫れ釋尊は轉輪聖王として一天四海の主となり玉ふべき身なれども、而も之を捨て人の門戸を巡りて施しをなさしめ玉ふは、衆生の爲に貪欲をはなれ、來世の餓鬼の苦患を救はんが爲なり須菩提は富貴の家を擇びて行き、迦葉は貧賤の家を擇びて旋る富貴の者は今日の威勢に貪著して來世のことを顧みず、是を以て須菩提は之を憐れみ、貧賤の者は過去世に於いて福を植し善根なきが故に此世に生れて貧賤なり、此世に於いて福を修せしめずんば來世に於いてます〳〵乏貧乏ならん、故に迦葉は之を慈

れむなり、然るに有るが上にも尙ほ足ることを知らず、日日有財餓鬼の業を造りて、彼の難陀長者が慳貪の報にならへるは最も憐愍す可きの徒なり、三毒の中にも慳貪を以て第一と爲す、故に諸佛是を戒め玉ふなり、是を慳生毀辱戒と云ふ。

瞋恚は火の如し、よく一切の物をやく薪を積みて須滿山に均しきの多きも一星の火に依て悉くみな灰燼となる、瞋恚の積善を滅盡することも亦復かくの如し、五逆の重罪も多くは瞋恚より起り、合戰に及び國家を滅亡するも瞋恚より起る、又深く怨讎を結んで累劫にも解し難きもみな一念の瞋恚に仍て起り、八大地獄に墮ちて無量億刼の苦患を受くるも、たゞ此一念の瞋恚に依る、總に一念を以て能く八萬の障門を披く者は是れ此の瞋恚なり、況や前人悔を求めて善言懺謝すれども尙瞋つて解けざるは愚痴の最も甚しき者なり、是を以て諸佛これを戒め玉ふ、是を瞋不受謝戒といふ。

三寶を毀謗する者は成佛の期あることなし、是を無性の闡提と云ふ、闡提は梵語、此には此佛性と云ふ、衆生を勸誘して同じく八大地獄に入らしむるものは此闡提人に過ぎたるはなし、是れ一切衆生の大怨敵なり、涅槃經に曰く『蟻子ヲ殺害スルモ猶殺罪ヲ得レトモ一闡提ヲ殺スハ殺罪アルコト無シ』と三寶を毀謗するの重きこと是を以て知るべし、諸佛の最も戒め玉ふ所なり、是を『毀謗三寶戒』と云ふ、此の五逆と十惡とは勿論なり、其外惡と云ふべきことは一切作るまじと慎み習ふを諸惡莫作修と云ふ。

○所謂衆善奉行修とは、父母に孝順し、次に十善を行ふべし、一には人の生物を殺すを見ては方便を以て之を救ひ、二には人の物を偸まるゝを見ては方便して以て取返して之を與へ、三には人の邪婬を見ては密に諫めて之を止めしめ、四には人の妄語を見ては之を諫めて其心を改めしめ、五には人の酒を酤るを見ては之を諫めて家業を革めさせ、六には法中の惡事を見ては密に之を諫めて外のあなどりを禦ぎ、七には他人の好事をば稱揚し惡事をば措き、自身の非をば之を改め、是をばほこらず、八には分に隨つて施しを行じ、人をも勸めて之を行はしめ、九には人の瞋恚を見ては之を諫め、中に立つてよく鬪諍を止めさせ、十には深く三寶に歸依して先づ名師を尋ねて佛戒を受け、說法の所あらば遠き所なりとも行いて聽聞し、分に隨つて堂塔を建立し、伽藍を修覆し、佛具法器を獻上し、經典を納め恭敬して三寶を供養し、廣く人を勸めて善根を修せしめ、其外一切善と謂ふべきことを行ひ習ふを衆善奉行修と云ふ。

人の縱に惡事をなせども爲合の好きを見ては、是は宿世の善行の致す所の果報なり、此の果報の盡る時、今日作す所の惡業隨つて露はるべしと考へ、我れ此世に於いて種々の善事を作せども諸事爲合の惡しき時は、是は宿世の報ひなり、此世にてもあれ、次に世にてもあれ、此惡業の盡る時、今日作す所の善事の果報必定して露はるべしと樂み、前に說く所の三時業の道理を深く明めて一點も疑ひの念を起す可らず、古人の曰く、疑ひは事の賊也と、世間の事すら尙大事に臨んでは二念に涉つては成就し難し、況や佛法の大事に於いてをや、佛法の大海は信を以て能入とし智を能度とす、信心全からざれば入ること能はず、正智を具せざれば渡ること難し、一切の惡事を作らざれば當來に於いて惡道に落つべき恐れなし、稗を植されば稗を穫らざるが如し、諸の善根を修すれば當來に於いて必ず善趣に生するの樂みあり、米を植れば隨つて米を穫るが如し、先づ斯くの如くに今日の土臺をたしかにする、然して後に自淨其意の修行にかゝるべし、意はすなはち心にして自淨其意とは歡心の義なり、夫れ善も亦心より起り、惡も亦心より起る、佛と成るも心なり、衆生と成るも心なり、故に曰く『若人欲レ了ニ知三世一切佛一應レ觀ニ法界性一一切唯心造』と、凡夫は心の性相を知らず强ひて之を執して我となす、此我竟に生死流轉の根源となる故に生死を出離して解脫の門に得入するの修行は必ず先づ觀心より始まる、此心是れ何物ぞ、云何なる性相かあると觀念すべし、心を識得せざれば執著を離れず執著は是れ不淨なり、故に楞嚴經に曰く『自心ヲ以テ自心ヲ取レバ非幻モ幻法トナル、取ラザレハ非幻モ無シ、非幻ナホ生ゼズ幻法云何ガ立セン、是ヲ妙蓮華金剛王寶覺如幻三摩提ト云フ、彈指ニ無學ヲ超フ、此ノ阿毘達磨ハ十方ノ薄伽梵一路涅槃ノ門ナリ』と是くの如きの觀心は定に依て修し、定は戒に依て生ず、然れども在家は戒行全からず、是を以て定を生ずること最も難し、それ諸惡莫作衆善奉行は是れ諸佛の通戒なり、よく此戒を守れば定も亦自ら生ず、定に依て慧を發す、慧を發すれば自心を識る、夫れ實の如くに自心を識得する是を圓覺と云ふ、故に圓覺經に曰く『覺圓明ナルガ故ニ心

ノ清淨ナルコトヲ露ハス』と夫れ心の清淨を得るときんば一切みな清淨なり、故に同經に曰く『心清淨ナルガ故ニ見塵清淨ナリ、見清淨ナルガ故ニ眼根清淨ナリ、根清淨ナルガ故ニ眼識清淨ナリ、識清淨ナルガ故ニ聞塵清淨ナリ、聞清淨ナルガ故ニ耳根清淨ナリ、根清淨ナルガ故ニ耳識清淨ナリ、識清淨ナルガ故ニ覺塵清淨ナリ、是ノ如ク乃至鼻舌身意モ亦復カクノ如シ、善男子 根清淨ナルガ故ニ色塵清淨ナリ、色塵清淨ナルガ故ニ聲塵清淨ナリ、香味觸法モ亦復是ノ如シ、善男子六塵清淨ナルガ故ニ地大清淨ナリ、地清淨ナルガ故ニ水大清淨ナリ火大風大モ亦復是ノ如シ善男子、四大清淨ナルガ故ニ十二處十八界二十五有四洲四惡趣、六欲、並ニ梵天、無想及ビ那含、四禪、四空處清淨ナリ、乃至虛空ヲ盡シ三世ヲ圓裏シ一切平等ニシテ清淨不動ナリ』と又曰く『始メテ知ル衆生ノ本來成佛ナルコトヲ』と若し人自淨其意を會得すれば是の如く父母所生の此身卽ち是れ本來成佛なることを識得するなり。

若し又此の六寂光門に依て修行する時、自淨其意の一著に於て會する者と會せざる者と眼光落地の時畢竟何れの處にか去るやと問はゞ、均しく是れ寂光淨土に往生するなり、そは此の往生は非を以てゆき、生ずるに非を以て生ず、何れの處か是れ寂光と問はゞ、處として寂光に非ざるはなし何が故ぞ是くの如くなるや。

▼墻外云く、法王釋迦牟尼佛の淨土は方角なきが故に往來の相を見ず、往來の相を見ざるが故に我

れは卽ち往生と言はすして化生又は安住と言ふ。

○觀普賢菩薩行法經に曰く『釋迦牟尼名二毗盧遮那徧一切處一其佛住處名二常寂光一常波羅密所二攝成一處、樂波羅密所二安立一處、我波羅密滅二受想一處、淨波羅密不レ受二身心相一處』と、是れ常樂我淨の四德の所感の國土なり ○大般涅槃經に曰く、善男子有下名二涅槃一非中大涅槃上、云何涅槃非二大涅槃一、不レ見二佛性一而斷二煩惱一、是名二涅槃一非二大涅槃一以レ不レ見二佛性一故無レ常無レ我唯有二樂淨一以二是義一故雖レ斷二煩惱一不レ得三名爲二大涅槃一、若見二佛性一能斷二煩惱一是則名爲二大涅槃一、以レ見二佛性一故得二名爲二常樂我淨一以レ是義故、斷二除煩惱一亦得レ爲二大涅槃一、又曰因レ得二阿耨多羅三藐三菩提一故常樂我淨具足而有、卽是無上大涅槃』と

然れば大涅槃は卽ち是れ常樂我淨なり、常樂我淨の國土なれば常寂光は卽ち是れ大涅槃なり、是に由て之を見れば大般涅槃と常寂光とは異名同體なり○大寶積經に 佛言無レ有三少法不レ到二彼岸一者卽是涅槃、一切諸法悉涅槃相、是故當知不レ可二宣說一と涅槃又翻して寂滅と云ふ○大乘妙典に曰く、『諸法寂滅相不レ可二以レ言宣一』と生滅の法を滅盡し了るが故に寂滅と云ふ、故に涅槃の翻譯を不生不滅とも云ふ也諸苦を斷盡するが故に安樂とも翻す、夫れ一切諸法悉く皆涅槃の相なれば十方世界寂光土に非ずと云ふことなし、故にいふ處として寂光に非るはなしと、唯是れ會する者は到る處みな寂光なり、會せざる者は娑婆と見るのみ也、故に維摩經に佛、長者子寶積に告げて言はく、寶積もし菩薩淨土を得んと欲せばまさに其心を淨むべし、其心の淨きに隨つて佛土淨しと爾時に舍利弗、佛の威神をうけて是の

念を爲さく、若し菩薩心淨きときは佛土淨しとならば、我が世尊もと菩薩たりし時、意豈不淨にして是の佛土の不淨なること此の若くならんやと、佛その念を知しめして卽ち告て言はく、意に於いて云何、日月豈不淨ならんや而も盲者は見ず、曰く不なり世尊、これ盲者の咎なり日月の咎に非ず、舍利弗衆生の罪なり、故に如來の佛國の嚴淨なるを見ず、如來の咎に非ず、舍利弗わが此土は淨けれども汝は見ず、爾時に螺髻梵王、舍利弗に語らく、是念を作すこと勿れ、此佛土を謂つて不淨とすと、所以は如何、われ釋迦牟尼佛の土の淸淨なるを見るに、譬へば自在天宮の如し、舍利弗の曰く、我此土を見るに丘陵坑坎、荆棘沙礫土石諸山穢惡充滿せりと、螺髻梵王の曰く、仁者は心に高下ありて佛慧に依らざるが故に此土を見て不淨となすのみ、舍利弗、菩薩は一切衆生に於いて悉く皆平等にして深心淸淨なり、佛智慧に依るときには能くこの佛土の淸淨なるを見る、是に於いて佛、足の指を以て地を按し玉へば卽時に三千大千世界、若干百千の珍寶嚴飾せること譬へば寶莊嚴佛の無量功德寶莊嚴土の如し、一切の大衆未曾有なりと歎じて皆みづから寶蓮華に坐するを見る、佛舍利弗に告げ玉はく、汝且く是の佛土の嚴淨なるを見るや、舍利弗の言さく唯然り世尊本と見ざる所なり、本と聞かざる所なり、今佛國土の嚴淨悉く現ぜり、佛、舍利弗に告げ玉はく、我が佛國土の常に淨きこと此の如し、此下劣の人を度せんと欲するが爲の故に此の衆惡不淨の土を示すのみ、譬へば諸天の寶器を共にして食すれども、その福德に隨つて飯食に異りあるが如し、此の如く、舍利弗もし人心淨ければすなはち此土の功德莊嚴を見ると、佛この國土の嚴淨を現じ玉ふの時に當り、寶積の將ゐる所の五百の長者子みな無生法忍を得て、八萬四千の人阿耨多羅三藐三菩提の心を發す、佛、神足を攝め玉ひしかば、是に於いて世界また復すること故の如しと、故に云ふ、會する者は到る處是れ寂光なり、會せざる者は娑婆と見るのみと、肇公此經の註に曰く、寶莊嚴土は淨土の最なり、故に以て喩と爲すと、夫れ諸佛の國土は十方に散在して其數あげて計ふ可らず、皆是を淨土と云ふ一類暗短愚蒙の族あり、思へらく淨土と云ふは彌陀の極樂世界に限りて外にまた有ることはなしと、此の如きの愚蒙は不學文盲の甚しきが致す所なり、特に知らず淨土は佛國の總名なりと云ふことを、それ諸佛の淨土に大小の異あり、功德莊嚴の異あり、其外種々の異あること維摩經の佛國品に依て之を解すべし○阿彌陀經に曰く、爾時に佛長老舍利弗に告げ玉はく、是より西方十萬億の佛土を過ぎて世界あり、名けて極樂と云ふ其土に佛います阿彌陀と號す、いま現に在して說法し玉ふ、舍利弗かの土を何が故に極樂と爲すとならば、其國の衆生は衆苦あることなく、たゞ諸樂のみを受く、故に極樂と名く又舍利弗極樂土には七重の欄楯、七重の羅網、七重の行樹皆是れ四寶を以て周匝し圍遶せり、是故に彼國を名けて極樂と云ふ、又舍利弗極樂土に七寶の池あり、八功德（輕、淸、冷、軟、美、香飮無厭、飮無患）水其中に充滿す、池の底には純ら金沙を以て地に布けり、四邊の階道は金銀瑠璃玻璃合成せり上に樓閣あり亦金銀瑠璃玻璃硨磲赤碼碯を以て而も是を嚴飾せり池中の蓮華大にして車輪の如し、青色には青光あり、黃色には黃光

あり、赤色には赤光あり、白色には白光ありて微妙香潔なり、舍利弗極樂國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり、又舍利弗かの佛の國土には常に天樂を爲し黃金を地となす、晝夜六時に曼陀羅華を雨ふらす、其國の衆生常に淸旦を以て各々衣械を以て衆の妙華を盛つて他方の十萬億の佛を供養し奉る、すなはち食時を以て本國に還り到る飯食して經行す、舍利弗極樂國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり、また次に舍利弗かの國には常に奇妙雜色の鳥あり、鶴、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、共命の鳥なり、是の諸々の衆鳥晝夜六時に和雅の音を出す、其音五根（信根、進根、念根、定根、慧根）五力（信力、進力、念力、定力、慧力）七菩提分（念、擇、進、喜、輕安、定、捨）八聖道分（正見、正思惟、正語、正業、正精進、正定、正念、正命）是の如き等の法を演暢す、其土の衆生是の音を聞き已つてみな悉く佛を念じ、法を念じ僧を念ず、舍利弗汝是の鳥は實に是れ罪報の所生なりと思ふこと勿れ、所以者何となればかの佛の國土には三惡趣なし、舍利弗かの佛の國土には尙は三惡道の名もなし、何に況や實あらんや、是の諸の衆鳥は、皆是れ阿彌陀佛の法音をして宣流せしめんと欲して變化してなき玉へる所なり、舍利弗かの國土には微風吹いて諸の寶行樹および寶羅網を動かして微妙の音を出す。

譬へば百千種の樂を同時に共になすが如し、是の音を聞く者は皆自然に念佛念法念僧の意を生ず、舍利弗其佛の國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり、舍利弗汝が意に於いて云何ん、彼佛を何か故ぞ阿彌陀と號するや、舍利弗かの佛の光明無量にして十方の國を照すに障碍する所なし、是の故に號して阿彌陀となす、又舍利弗、かの佛の壽命および其人民無量無邊阿僧祇劫なるが故に阿彌陀と名く、舍利弗、阿彌陀佛、成佛せしより已來今に於いて十劫なり、又舍利弗かの佛に無量無邊の聲聞の弟子あり、みな阿羅漢なり、是れ算數のよく知る所に非ず、諸の菩薩衆も亦復是の如し、舍利弗かの國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり、又舍利弗極樂國土には衆生の生ずる者、皆この阿鞞跋致（此に不退と譯す）其中に多くは一生補處あり、其數甚だ多し、是れ算數のよく知る所に非ず、たゞ無量無邊阿僧祇劫を以て說くべしと。

阿彌陀佛の淨土、極樂世界の功德莊嚴それ是の如し○寶積經に曰く『爾時に師子勇猛雷音菩薩、佛に白して言さく、世尊文殊師利、當來成佛の名を何等とか爲す、佛の言はく、善男子此の文殊師利成佛の時の名を普見と爲す、復師子勇猛、佛に白して言さく、而もかの佛刹を名けて何等とか爲す、佛の言はく、彼の佛刹を隨願積集淸淨圓滿と名く、師子勇猛の言さく　世尊かの佛世界何れの方所にか在る、佛の言はく、南方に在りと、復曰く、爾時に衆中に諸の菩薩あり、是の如きの念を文殊師利所得の佛刹の功德莊嚴と阿彌陀の佛刹と等しとせんや不やと、爾時に世尊かの菩薩の心の所念を知しめして便ち師子勇猛に告て言はく、善男子譬へば人ありて一毛を折りて百分として一分の毛を以て大海の中に於いて一滴の水を取て此一滴水を阿彌陀の莊嚴に喩へ、かの大海水を普見如來の佛刹の莊嚴に譬

ふるともなほ此れに過ぎたり、何を以ての故に、普見如來の佛刹の莊嚴は不思議なるが故に、爾時に師子勇猛、佛に白して言さく、世尊此の如き等類の佛刹莊嚴三世の佛刹に於いて頗る更に有りや否や、佛の言はく有り、善男子東方此を去ること百億恒河沙の世界を過ぎて佛刹あり、往最上願と名くかの中に佛あり普光常多功德海王と名く、かの佛の壽命無量無邊なり、常に菩薩の爲に而も法を演說し玉ふ、善男子かの佛の刹土の功德莊嚴と普見の佛刹と等ふして異なることなしと、然れば普見佛の圓滿淨土、並に海王佛の上願淨土の功德莊嚴の阿彌陀佛の極樂淨土に勝れたること大海水の一滴水に對するが如し、然れども寶莊嚴土は淨土の最なりと云ふときんば、圓滿淨土も上願淨土も寶莊嚴佛の無量功德寶莊嚴土には及ばざること分明なり、功德莊嚴を以て云ふときんば、常寂光土と寶莊嚴土と等匹なし、然れば極樂世界の寂光世界に及ばざることは一毛端の水を以て大海水に對して其の多少を計るよりも劣れることは言はずして知んぬべし。

又無量壽經に曰く、彼の佛國土は淸淨安穩にして微妙快樂なること無爲泥洹の道に次げりと、彼の佛國土と云へるは極樂世界の謂なり、泥洹とは涅槃の異名なり、涅槃は卽ち寂光の本體なり、次げりと云ふときんば、極樂も寂光には及ばざること分明なり、是を以て彌陀佛もまた竟には寂光に入るなり。

○觀世音菩薩得大勢菩薩受記經に曰く『善男子當來曠遠不可計劫に阿彌陀佛まさに般涅槃すべし』とあり（般は入の義也）阿彌陀なほ寂光に歸す況やその餘の極樂世界に往生せる者をや唯阿彌陀佛のみならんや、十方三世の諸佛、一佛として寂光に歸せざるはなし。

○大乘妙典に曰く、今此の三界は皆此れ我有なり、其中の衆生は悉く是れ吾子なりと、然れば釋迦牟尼佛は一切衆生の慈父なり、慈父の淨土は寂光世界なり、我が慈父の淨土を打ち捨てゝ他土の遠方に往生せんと擬するは將また何の心行ぞや、是を以ての故に我が佛心宗に於いては敢て他土の往生を求むることを勸めず、然れども衆生の機宜區なるが故に求むるをも亦妨げず、是れ佛心宗の佛心に準する所以なり、世尊何を以てか直に自己の寂光世界に歸することを勸めずして他方の佛土を說いて人をして枉げて外邊に向つて往生せんことを求めしむるやと云はゞ曰く、諸大乘經は皆是れ自己の寂光世界に歸せしむるの指南なり、豈勸めずと云ふ可けんや然れども衆生の機根等しからず、中に於いて方木圓孔の者あり故に已むことを得ず、他方の往生を說いて暫く其機を匡す、是れも亦如來の一方便なり。

▲墻外云く、釋迦牟尼如來の一方便なるを看破して彌陀極樂の何者たることを解すれば方便も亦法苑の妙好華である、此の妙好華を見て眼を喜ばし、意を樂しくし安心を得る衆生も少なからぬ、佛在世に於いても韋提希夫人や月蓋長者の如きは此の善巧方便に依りて安心を得たものである、又支那日本に於いても釋尊の好方便に依りて助けられた者が幾千萬億あるやも測り知られぬ、今尙ほ信者らしき佛法信者を求めんとしたならば先づ以て之を淨土門に求めなくてはならぬ。

然れども方木は圓孔に入らず、佛心宗の見地よりするときは此の方便に依りて安心を與ふることは斷じて出來ぬ。

高祖承陽大師の言はく『或ハ人ヲシテ心外ノ正覺ヲ求メ教メ或ハ人ヲシテ他土ノ往生ヲ願ハ教ム、惑亂此レヨリ起リ邪念此レヨリ職トス』と又言はく『誠ニ夫レ勝ヲ愛ス可キ所以ノ者ハ勝ヲ愛ス可キ也　哀ム可シ邊鄙ノ境、邪風扇キ易ク正法通ジ難シ……前來入唐ノ諸師皆教網ニ滯ルガ故ナリ、佛書ヲ傳フト雖モ佛法ヲ忘ルヽガ如シ、其益是レ何ゾ其功終ニ空シ、是レ乃チ學道ノ故實ヲ知ラザルガ所以ナリ、哀ム可シ徒ラニ勞シテ一生ノ人身ヲ過スコトヲ』と入唐の諸高僧が已に教網に滯りて方便の故實を知らず、文字の通りに解して文外領略の佛意あることを知らずに居る、況して入唐せざる人師は無論のことである、故に承陽高祖は假初にも他土の往生を勸めましまさず、彌陀佛に歸命せしめましまさず、其の信佛歸佛の點に於いては只釋迦牟尼佛を以てせられ、餘佛に歸せよとは教へまさぬ、乃ち言く『十方諸佛ニ見エタテマツベクンバ釋迦一佛ニ見エタテマツル可シ』と龍樹祖師も亦曰く『十方諸佛ト云フト雖モ實ハ釋迦一佛ナリ』と龍樹祖師は西天の十四祖なり、承陽祖師は日域の第一祖にして乃ち釋迦牟尼佛より第五十一世の正傳にまします末代の法王である、云何にして權教の方便を弄したまはん、玄樓禪師は承陽門下の正嫡であるゝ故に祖意を擧揚して方便の權教を取りたまはぬ。

○大乘妙典に長者窮子の譬あり、是も亦其の譬に均し、曰く譬へば若し人有り、年既に幼稚にして父を捨てゝ逃逝し、久しく他國に住んで、或は十二十より五十に至り、年すでに長大にしてます〳〵窮困に馳騁して以て衣食を求め、漸々に遊行して本國に相向ひぬ、其父先よりこのかた子を求むるに得ず中頃一城に止りぬ、其家大いに富で財產無量なり、金銀瑠璃珊瑚琥珀玻璃珠等、其の諸の倉庫に悉く皆盈溢して多く僮僕臣佐吏民、象馬 車乘、牛羊無數にして出入息利することありて、乃ち他國までも徧く商估賈客亦甚だ衆多ならん、時に貧窮の子諸の聚落に遊び、國邑に經歷して遂に其の父が所止の城に到りぬ、父常に子を念うて離別してより五十餘年なり、然れどもいまだ曾て人に向つて是の如きのことを說かず、みづから思惟して心に悔恨を懷けり、自からおもはく、老朽して多く財物あり、金銀珍寶倉庫に盈溢れたり、子息あることなく、一旦終歿せば財物散失して委付する所ならんと、是を以て慇懃に每に其子を憶ふ、復この念をなす、我れ若し子を得て財物を委付せば、坦然快樂にしてまた憂惱なからんと、世尊爾時に窮子傭賃展轉して偶々父の舍に到り門の側に住立して遙に其父を見れば師子の床に踞して、寶几足を承けたり、諸の婆羅門、刹利居士みな恭敬し圍遶し、眞珠瓔珞の直ひ千萬なるを以て其身を莊嚴せり、吏民僮僕は手に白拂を取て左右に侍立せり、覆うに寶帳を以てし、諸の華幡を垂れ、香水を以て地に灑ぎ、衆の名華を散ぜり、寶物を羅列し出納取與す、是の如き等の種々の嚴飾有りて威德特尊なり、窮子父の大勢力あるを見て、すなはち恐怖を懷き、此に來り至るこ

とを悔み、ひそかに此念をなす、此もしくは是れ王に等しきならんか、我れ傭力して物を得べきの處に非ず、貧里に往至して力を肆にする所あつて衣食の得易きには如かず、若し久しく此に住せば、或は逼迫せられて強ひて我をしてなさしめんと、是の念をなし已つて疾く走つて去らんとす。

時に富める長者師子座より是れを見て則ち我子たることを識りぬ、心大いに歡喜して卽ち是の念をなす、我が財物庫藏今は付する所あるべし、我れ常に此子を思念せしに之を見るに由なかりき、而るに忽ちに自から來れり、甚だ我が願ひに適へり、我れ年朽ちたりと雖も、なほことさらに貪り惜むと、すなはち傍人を遣はして急に追うて將ゐて還らしむ。

爾時に長者疾く往いて捉ふ、窮子驚き愕いて怨と稱して大いに喚ぶ、我れ犯さず、何それぞ捉へらる、使者之を執ふこと愈よ急にして强ひて牽將れ還らんとす、時に窮子自から念はく、罪無くして而も囚へ執へらる、此れ必定して死なんと、轉た更に惶怖し、悶絶して地に辭る、父遙に之を見て而も使ひに語つて曰く、此人を須ひざれ、强ひて將來ることなかれ、冷水を以て面に灑ぎて醒悟することを得せしめよ、又共に語ること莫れと所以如何となれば、父其子の志意の下劣なることを知つて自から豪貴なれば、子の爲に難かると知る、審に是れ子なりと知れども、而も方便を以て他人に語つて是れ我が子なりといはず、使者に語らしめて曰く、我今汝を放す、意の趣く所に隨へと、窮子歡喜して未曾有なることを得て而も地より起きて貧里に往き至り以て衣食を求む。

爾時長者まさに其子を誘引せんと欲して而も方便を設け、密に二人の形色憔悴して威德なき者を遣はす、汝かしこに至つて徐に窮子に語るべし、此に作處あり、倍して汝に直を與へんと、窮子若し許さば將來つてなさしめよ、もし何の所作をか欲するといはゞ則ち之れに語るべし、汝を傭うて糞を除かしめん、我等二人も亦汝と共になさんと、時に二の使人すなはち窮子を求め、すでに之を得て具さに上のことをのぶ、爾時に窮子まづ其價を取て尋いで共に糞を除く、其父子を見て愍れみて而も之を怪む、又他日を以て牖牖の中より遙に其子を見れば、羸瘦憔悴して糞土塵垢に汚穢て不淨なり、すなはち瓔珞細軟の上服嚴飾の具を脱いで、さらに麁弊垢膩の衣を著けて塵土を身に坌し、右の手に除糞の器を執持して畏る所あることを知り、諸の作人に語らく、汝等勤めなして懈怠することを得ること勿れと、方便を以ての故に其子に近づくことを得たり、後に復告て言く、咄い哉男子、汝常に此にしてなせ、また餘に去ること勿れ、まさに汝に直をますべし、諸の所須ある盆器米麪、鹽醋の屬もあり自ら疑ひ難ること莫れ、亦老弊たる使人もあり、須ん者をば相給はん、好く自ら意を安ぜよ、我は汝が父の如し、又憂ひ慮ること勿れ、所以如何となれば、我年老大なり、而も汝は少壯なり、汝常になす時に欺き怠り、恨み怨むることなし、都て汝が此の諸の惡ること餘の作人の如くなることを見ず、自今以後所生の子の如くすべし、卽時に長者また爲に字を作り之を名けて兒となす。

爾時に窮子これに遭ふことを欣ぶと雖も、なほ故らに自ら客作の賤人なりと思へり、是れに由るが故

に二十年の中に於いて常に糞を除かしむ、是を過ぎて已後心に相體信じて出入に難ることなし、然れども其所止はなほ本處に在り。

世尊爾時、長者疾あつて自らまさに死んこと久しかるまじと知て窮子に語つて言く、我等今多く金銀珍寶有つて倉庫に盈溢り其中に多くも少くも取與ふべき所をば汝悉く之をしれ、我が心是くの如し、まさに此意を體すべし、所以如何となれば、今我と汝とすなはち異ならずとす、宜しく用心を加ふべし、漏失せしむること勿れと、爾時に窮子すなはち教勅を受けて衆物金銀珍寶及び諸の庫藏を領知すれども而も一餐をも希取するの意なし、然れども其所止は故らに本處に在り、下劣の心いまだ捨ることを能はず、また少時を經て父子の意を知ぬ、漸く已に通泰して太志を成就し、自ら先心を鄙んじ終らんと欲する時に臨で而も其子に命じ、並に親屬國王大臣刹利居士皆悉くすでに集りぬすなはち自から宣べて言く、諸君まさに知るべし、此は是れ我子なり我が所生なり、某の城中に於いて吾を捨て逃走つて伶丼辛苦すること五十餘年なり、其本の字は某なり、我名は某甲なり、昔し本城に在つて憂ひを懐いて推覓し、忽ちに此間に於いて遇ひ會うて之を得たり、此れは實に我子なり、我れは實に其父なり、今我が所有一切の財物皆是子の有なり、先に出内する所は是子の知る所なり、世尊是の時に窮子父の此言を聞いてすなはち大いに歡喜して未曾有なることを得て而も是念をなさく、我もと心に希求する所以あることなかりき今この寶藏自然にして至れりと。

夫れ世尊の諸大乘經を說いて人々佛子たることを知つて直に自己の寂光世界に歸らしめんとし玉ふは、所謂急追將還疾走往捉の手段なり、然れども自家の寶藏あることを信ぜず、他力の傭賃を貪り求むるの族は驚疑怖畏して悶絶躃地するが故に暫く之を放捨して、勝手次第に他方の佛土に往生せよとの玉ふは、我今放(レマス)二汝(ニ)隨意所趣(ノ)一の方便なり、然れども其實はなほ漸々に誘引して竟には我この寂光淨土に歸らしめんと要するの意なり。

世尊すでに是の如く把住放行兩手完全の作略あり、是を以て吾宗は機を見て其宜しきに隨つて導くが故に在家への教へ敢て偏局に落ちず、然れども其實は世尊と同じく急追將還の處に在るなり、我慈父釋迦牟尼佛の寂光世界を知らず、他方の佛土に往生せんと願ふは豈彼の捨父逃逝の窮子に非ずや、伶丼辛苦のありさま最も憐愍すべき者なり、もし能く體信するの徒有りて慈父の家鄉に還らんことを要せば、所謂六寂光門に依りて修行すべし、中に就いて自淨其意の觀心は寂光世界の直道なり、十方諸佛、一佛として此道より入らざるはなし、若し亦此觀心の義に於いて方角不審の所あらば我が佛心宗の善知識に參得して以て其指南を蒙る可し、光陰箭の如く、露命は無常なり、一回人身を失ひぬれば萬劫にも還り難し、夢幻空華の五欲の爲に誑惑せられて、昨日もいたづらに過し、今日も亦空しく送りて永劫の後悔を殘すこと勿れ。

▲墻外云く、以上の修行品は在家の善男善女をして皆悉く自己の寂光淨土に歸入せしめんとする理

由を説明せられ、以下の羯磨品は其の作法を説示せられたものである、即ち羯磨とは作法といふ意味になる。

羯磨品

師曰く、六寂光門に依て修行する者は必ず、釋迦牟尼佛を以て本尊となし、右は達磨大師、左は其派の日域の高祖を安じ、次に先亡の位牌等を置く可し、且朝暮の勤行は先づ本尊に向つて三拜をなし、次に坐して懺悔の文を唱ふること三返、次に三歸戒の文を唱ふること三返、次に通戒偈を唱ふること三返、次に稱名或は七返或は三返時の宜しきに隨ふべし、次に心經（もしせはしき時は稱名を以てかふるもよし）一卷よみて先祖代々諸精靈等と回向し、次に消災咒（此れも亦稱名にてかふるもよし）三返にて家内安全福壽無量と祈念をなし畢つて普回向を唱へ、復禮三拜して退くなり、右何れも一人擧經すれば餘人は皆同音につくるなり、下女下男を除いて主人分の者は子供に到るまで之を欲かしむること勿れ。

懺悔の文

我昔所造諸惡業　皆由無始貪瞋癡
從身口意之所生　一切我今皆懺悔

三歸戒の文

南無歸依佛　南無歸依法　南無歸依僧　歸依佛無上
尊　歸依法離塵尊　歸依僧衆中尊　歸依佛竟　歸依法
竟　歸依僧竟

通戒の偈

諸惡莫作　衆善奉行　自淨其意　是諸佛敎

稱名

南無大恩敎主釋迦牟尼世尊
震旦初祖菩提達磨圓覺大師
日域高祖佛法禪師道元大和尚

是なり、其れ我が佛心宗は本師釋迦尼佛親しく之を迦葉尊者に付屬し玉ひ、二十八祖達磨大師始めて震旦國に來りて之を慧可大師に授く、其れより第六代の祖師大鑑禪師に至りて法運大いに開け、其後分れて五派となる、所謂雲門宗、法眼宗、潙仰宗、曹洞宗、臨濟宗是なり、其中我が日本に傳はれるは臨濟曹洞の二派のみなり、後に黄檗宗といへる者來るといへども、是亦臨濟宗の一つなり、濟家の

宗祖其數最も多しといへども、始めて此宗を傳へ歸られしは建仁寺の榮西千光國師なり、我が曹洞宗の如きは、高祖道元禪師入宋し玉ひ、四明天童山如淨禪師に見えて親しく其法を嗣いで歸朝あり、初は城州の興聖寺に住し後越前の永平寺に隱れ玉ふ、其法扶桑に徧蔓して今已に五萬箇寺になん〳〵とす（墻外云く、此數字は漠然の嫌ひあり）此の如く三國の佛祖嫡々相承して今吾れ玄樓に至りて已に七十三世となるなり、此れ皆不立文字教外別傳の旨を以て佛の心宗を傳ふること一器の水を一器に移すが如く、毫髮ばかりも違易あることなし、苟くも我が佛心宗の流れを汲で之が法波を蒙むる者は幸の中の最も幸なる者か、豈慶快せざる可んや、二祖三佛忌は言ふに及ばず、尋常とても知恩報答の念に住して香華供養に怠ること有るべからず、所謂三佛忌は二月十五日の涅槃忌、四月八日の誕生忌、臘月八日の成道忌是なり、又二祖忌とは八月二十八日は永平忌、十月五日は達磨忌なり、其外列祖の尊號竝に諱日等のことは各々其香華寺に就いて以て之を審にすべし。

▲墻外云く、洞宗の高祖道元禪師入滅以後、玄樓禪師に至る凡そ五百餘年間、法子法孫の輩出は舉げて數ふることは出來ぬのであるが、其間に於いて在家化導法に就いて具體的に其の主義及び作法を說示せし宗師があるであらうか、あるまいか、余は寡聞少見にして之を能く調査することが出來ぬ、我宗二萬一千五百三十一人（一人は余なり）中能く之を知る人ありや否や、余の少見なる玄樓禪師に此の垂語ありしと云ふこと漸く此頃、故人栖川興巖禪師の遺稿（其の誤寫）に依りて高覽博識の法師より敎へられたのである、蓋し此書を知らざる人も定めし多からんと察したるに依り、此に其の要處のみを拔萃して安心回顧の一大證憑としたのである、本書を見るまでは永平寺二代忌の會議乃至栖川辻兩師を以て釋尊一佛論者の中興元祖と思ひしに、何ぞ圖らん、今より百年以前已に此の堂々たる主張ありしとは、若し玄樓禪師以外に於いて在家化導儀の尊宿なしとせば、禪師は實に高祖滅後の第一人として、間生の古佛なりと崇め奉らなくてはならぬ。禪師が壯年の時、洞宗の念佛（彌陀）者月泉を濟度し且つ驅獅蟲論を書かれしことは、其の五分錄中に於いて之を拜讀すること年已に久しかりしが、余は常に此人にして此の破壞論のみありて建設論なきは云何と不審に堪へざりしに、過ちの光明によりて此の建立門あるに逢へるは盲龜浮木の思ひがしたのである、而も寂光世界歸入論の一節に至りては最も其の痛快を極むと云はねばならぬ、又信仰の對象として釋迦牟尼佛を本尊にせよとの一段は吾人の最も意を得たる活文字である。

曹洞教會說教大意

辻顯高述

緒言

我宗ニ語句ナク實ニ一法ノ人ニ與フルナシ、是ヲ以テ達磨東土ニ來ラズ、二祖西天ニ往カズト示ス、然レドモ釋迦牟尼佛ヨリ吾人ニ至ルマデ師資相承血脈不斷ナル者ハ何ゾヤ、是レ天然ノ釋迦ナク自然ノ彌勒ナフシテ、道孤リ運バズ之ヲ弘ムルコト人ニ由ルヲ以テナリ、然ル所以ハ大悲止ムコトヲ得ザル者ニシテ所謂一切衆生ノ病ヲ以テ問疾ノ人ヲ待ツ者、他ナシ其待ツテ相逢フトキハ一ハ無言無說、一ハ默然タル所ニ於テ始テ能所ノ病根消滅セリトス、卽チ不來ノ相ニシテ來リ、不見ノ相ニシテ見テ無言中ノ有語ナレバ、固ヨリ往來授受ノ形跡ニ落チズシテ相續不斷ナル者歟、彼ノ長者ノ自ラ糞器ヲ把テ窮子ニ近ヅキシト同一轍ニシテ異路ナカルベシ、然リ而シテ若シ一切衆生ノ病悉ク消滅セバ、我ガ病モ亦消滅スベシ、此際良醫アリト雖モ、徒ニ手ヲ拱スルノミ乎、否其病者ノ悉ク消滅スルコトハ萬々アルベカラズ、タトヒ不病者ト雖モ今ノ文明世界ヨリ將キテ道德世界ニ進歩スルモ動モスレバ尙ホ惡路ニ蹉躓シ、惡病ニ感染シテ自ラ貴重ノ健康ヲ傷害スル者尠シトセズ、良醫ニ乏シト雖モ豈ニ豫防ノ良策ヲ施サヾランヤ、況ンヤ衆生無始ヨリ以降、痴愛ノ病ニ感染シ、無明ノ長夜ニ熟寢スル者ヲ見テ、苟クモ我ガ傳道社會ニ衣食スル部分ニシテ奚ゾ之ヲ拋過スルヲ得ンヤ、是レ余ガ宗內初心晩學ノ爲ニ「說敎指南」ヲ編スル所以ナリ。

然レドモ此事易ナルガ如クニシテ其實太ダ難キモノナレバ、輙ク操觚スベキニ非ルヤ明カナリ、何トナレバ我宗ナル者ハ格量ヲ透脫シテ語句ニ落チズ、各自本具ニシテ授與往來ニ墮セザレバナリ、然リト雖モ是恐クハ上々ノ機ヲ接スルニ宜ウシテ中下ニ向テ之ヲ施ストキハ馬耳風ニシテ、例ヘバ舟筏ヲ假ラズシテ大海ヲ渡ラシメ、翅羽ヲ斬取シテ大虛ニ飛騰セシムルガ如クニシテ、其機ヲシテ遂ニ望洋ノ嘆アラシムルノミナラズ、救迷情ノ祖意ニ背反スルヲ免レザル者ナリ、然ルニ今釋尊ノ因位超世ノ悲願ニ報答シテ普ク此衆生ヲシテ痴黑闇ニ墮セズ成佛ノ好結果ヲ獲セシメント欲スルハ卽チ吾人社會ノ菩提心ニシテ義務ノ當ヲ盡ス者ナリ、之ニ依テ余ハ難易ヲ云ハズ言ノ鄙陋ヲ顧ミズ、扼腕切齒力メテ太意敎條指南第一編ヲ草シ、漸次ニ編ヲ重ネテ以テ職務ノ罪ヲ逃レント欲ス、看者庶クハ其意ノ在ル所ヲ取テ國字ノ文ヲナサヾルヲ咎ムルコト勿レ、是レ我宗ハ語句ナケレバナリ、之ヲ緒言トス。

第一條　表　準

釋尊ノ本懷ハ此五濁ノ衆生ヲシテ成佛セシメンガ爲ニ世ニ出現シ玉フ一大事因緣ナルヲ本宗敎導ノ大眼目ト爲ス（法華經方便品四佛知見章）

評註永祖釋尊觀附錄

第二條　報　德

初祖達磨大師ハ三周ノ歳月ヲ經テ漸ク漢地ニ渡來シ、敎家ノ網夢ヲ攪破シ、少林九年ハ無論我ガ片岡ニ勝躅ヲ現ハシ給フモ、唯傳法救迷情ノ旨趣ニ深重ナルコトヲ信ゼシム。

第三條　報　德

高祖國師(此時未ダ大師號ノ宣下アラザリシ也)入宋歸朝ノ生涯、開宗ノ正傳、眼藏ヲ始メ著述等總テ新豐曲高ウシテ窺ヒ難シト雖モ唯々自未得度先度他、生生世世行菩薩ノ誓願ト及ビ衆生ヲシテ信ゼシムル所ハ諸佛ヲ念ゼンヨリ釋尊一佛ヲ念ズベシトノ御旨ナルヲ信ゼシム。

眼藏卽心是佛ノ章ニ諸佛トハ釋迦牟尼佛コレ卽心是佛ナリ云々、知事淸規ニ十方諸佛ヲ見ル可クンバ釋迦一佛ヲ見ルベシ云々、建撕記下三十四丁、盡未來際永平老漢常ニ人間ニ在リテ晝夜當山ノ境ヲ離レズ云々、傘松道詠ニ草ノ庵ニ寢テモ寤テモマヲスコト南無釋迦牟尼佛アハレミタマヘ等。

第四章　報　德

太祖國師(是亦未ダ大師號ノ宣下アラザリシ時ナリキ)ハ三祖徹通禪師ニ投ジテ薙染シ、二祖孤雲禪師ニ戒ヲ禀ケ、終ニ三祖大乘ノ室ニ嗣法シ、尋デ城滿大乘二山ヲ董シ、永光淨住ノ二刹ヲ開闢シ、末後諸嶽ニ請ヲ受ケ各宗ニ超越シテ天皇ノ十疑ヲ決答シ給ウテヨリ出世本山賜紫ノ勅ヲ奉ジ、佛祖相承ノ的旨ヲ傳光シテ大ニ高祖開宗ノ所在ヲ擴張シ給フヲ知ラシム。

第五條　能所ノ緣

十方諸佛因位ノ立願モ咸ク殊勝ト雖モ　此五濁不淨ノ土ヲ捨テ、各々淨妙世界ヲ願取シテ善衆生ヲ度セント誓ヒタリ、然ルヲ釋尊因位之ヲ憂愁シテ自身ノ憔悴ヲモ顧ミズ、我等衆生ノ爲ニ此土出現超世ノ大願ヲ立テ玉フ、其ノ大悲深重ナルコトヲ述ス(悲華經五百願起發ノ取意)

第六條　安心ノ初步

五濁ノ衆生ハ諸佛ニ捨テラレテ釋尊一佛ノ憂慮ヲ被ムル所緣ノ者ナレバ必ズ五百ノ大願業力ニアラザレバ此衆生ハ不得成佛佛ナルコトヲ述シテ、信心ノ所依ヲ知ラシム。

悲華經第六卷二十二丁ニ曰ク願クハ是ノ衆生聞イテ我ヲ讚嘆シ心ニ歡喜ヲ生ジ、諸ノ善根ヲ種テ我世界ニ生セシメン「已上第百一願トス○世尊是ノ諸ノ衆生若シ臨終ノ時我レ其前ニ在リテ爲ニ法ヲ演說シ心ヲシテ淨カラ令メズレバ我レ未來ニ於テ終ニ阿耨多羅三藐三菩提ヲ成セズ」已上第百二願トス○若シ彼ノ衆生命終ノ後三惡道ニ墮シ、我ガ國ニ生ジ人身ヲ受ケズンバ我ガ知ル所ノ無量ノ正法悉ク當ニ滅失シテ有ラユル佛事成就セザルベシ」已上第百三願トス五百願中右三願ヲ骨目トシテ暗記スベシ

第七條　起行ノ初步

骨目ノ誓願ニ依賴シテ必得作佛スベキ旨ヲ信樂シテ不疑ノ地ニ至ラシムルヲ要所トス。

但シ半信半疑ノ衆生ト雖モ南無釋迦牟尼佛ト唱フルノミニテモ必ズ墮惡道ヲ免ルヽヲ知ラシムベシ。

第八條　安心ノ得所

南無釋迦牟尼佛ノ七字ヲ解釋シテ領解眞實ヲ得タル人ヲ本宗安心ノ一關ヲ獲得セリト許ス。

第九條　起行相續

領解不疑ノ信力ヲ相續スル卽チ佛恩報謝ニシテ面ノアタリ成佛ノ定リタル所ナリト信ゼシム。

第十條　安心ノ極處

自他平等變易アルコトナク衆生本具ノ釋迦佛ナレバ何ノ智カ具セザル、何ノ德カ有セザラン、是ニ於テ感應道交セバ高祖ノ(眼藏見佛ノ章)オホヨソ一切諸佛ハ見釋迦牟尼佛成釋迦牟尼佛スルヲ成道作佛トイフト示シ玉フコトヲ領得スベシ、是レ誰レヽ成道何人ノ作佛ナルヤ、所謂寫レ月非ニ眞月一圖レ龍失ニ本龍一者ニシテ但能ク意ヲ淨メ內ニ觀ズレバ了然トシテ寂現ス、猶ホ明鏡ニ臨デ自ラ其形ヲ見ルガ如シ、然リ雖モ其明鏡モ亦打破シ來ラザレバ洞徹圓明ナラズ、心念跡銷シテ但自ラ親ク到テ絕域ニ從容スベシト述ス。

第十一條　起行ノ極處

修セザレバ顯ハレズ證セザレバ得ルコトナケレドモ造次顚沛不染汚ノ地ニ至ッテ行解相應ノ實踐ヲ履行シテ始テ卽處報土往生ヲ感得スベキ旨ヲ述ス。

第十二條　身土不二

諸佛諸菩薩及ビ諸大善神等ハ本地釋尊ノ影響衆ナレバ恭敬禮拜シテ加被ヲ仰グベキ者ナレドモ、此心念口稱ハ釋尊一佛唯一心ニシテ足レリ、方便同居安養等ノ諸淨土ハ衆機ニ隨ッテ寂光報土ノ出沒隱顯ナレバ此土得證、去此不遠ナルコトヲ信解セシム。

第十三條　屋裏ノ禁諱

若シ上々ノ機ニ逢フ時ハ卽身成佛、此土卽淨土ト示スモ尙ホ敎家者流ノ談柄ニシテ混沌ニ眉ヲ畫キ蛇ニ足ヲ添フ者トス、故ヲ以テ臨機應變ト雖モ猥リニ本分ノ草料ヲ用ヒ掠虛麤暴ノ振舞ヲ作スコトヲ禁愼スベシ。

明治十二年三月

評註永祖釋尊觀附錄　終

大正七年二月廿一日印刷
大正七年二月廿五日發行

編纂評註者　東京市芝區愛宕町一丁目十六番地　高田道見

發行兼印刷者　東京市芝區愛宕町一丁目十六番地　永田顯了

印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社

發行所　東京市芝區愛宕町一丁目十六番地
振替東京二九四六番　佛教館

324
587

9. 8. 24

324
157

終